

「理学療法士養成教育における卒前教育の在り方」
－臨床実習指導者の指導観調査から－

【教育調査研究結果】

研究代表者：酒井 桂太¹⁾

共同研究者：日高 正巳²⁾・潮見 泰藏³⁾・岩崎 裕子⁴⁾・芳野 純⁵⁾・中川 仁⁶⁾

- 1) 大阪河崎リハビリテーション大学
- 2) 兵庫医療大学
- 3) 帝京科学大学
- 4) YMCA 米子医療福祉専門学校
- 5) 帝京平成大学
- 6) 専門学校 星城大学リハビリテーション学院

＜研究目的＞

新しい指定規則の下でのよりよい臨床実習指導が行われるよう、現行の臨床実習の実態および今後変わりゆく臨床実習指導への対応について意識調査を実施し、学校養成施設および臨床実習指導者に情報提供を行う。

＜研究対象＞

公益社団法人日本理学療法士協会に登録のある理学療法施設(医療施設と医療福祉中間施設 13,515 件)のうち、配信が成功した 11,138 名から、1 施設につき臨床経験 5 年以上かつ臨床実習指導に携わっている 1 名を回答者とした。有効回答数は 1162 施設であった。なお、臨床実習を受け入れている施設とそうでない施設の区分けができず、登録のある施設すべてに配信しているため有効回答率は算出できなかった。

なお、調査期間は 2021 年 3 月 1 日から同年 3 月 31 日までの 1 か月間とした。

＜研究方法＞

2018 年に日本理学療法教育学会が実施した養成施設教員対象の「理学療法士養成教育の実状」アンケートを参考に、臨床実習指導者および臨床実習教育の現状を把握するのに必要と思われる設問を抜粋・改変したアンケートをグーグルフォームで作成した。アンケートは選択回答形式(単一回答)と自由回答形式、順位回答形式(完全順位付け)の混在とし、Web 調査法での回答とした。

アンケート調査用紙の構成は、基礎情報が 8 問、「臨床実習全般」について 11 問、「臨床実習を取り巻く社会の変化」について 1 問、「臨床実習の指導方法」について 10 問、「臨床実習の制度」について 9 問の合計 39 問とした。

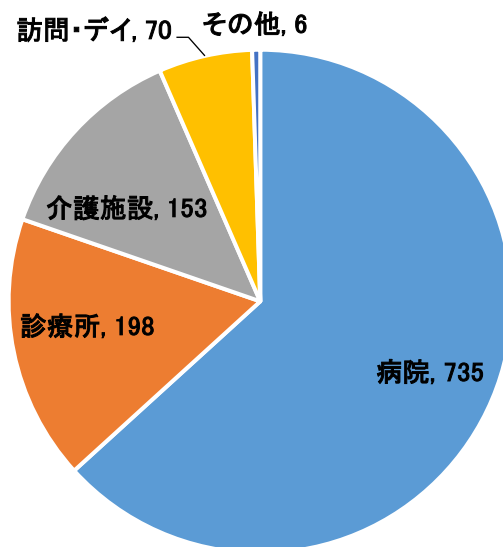
2021年3月1日に公益社団法人日本理学療法士協会学会事務課よりメールマガジンを使用してURLを一斉配信し、その後3月15日にリマインドを実施した。

<統計処理>

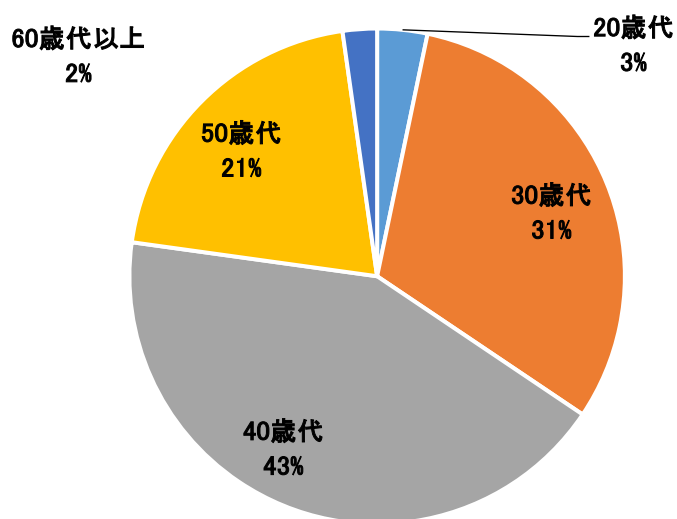
JSTAT、KH Coder(ともにフリーソフト)を使用した。基本情報を独立変数とし、各設問を従属変数としてクロス検定および分散分析(多重比較検定にはTukeyを使用)を実施し、有意水準は5%とした。さらに、自由回答形式のデータは、テキストマイニング法で対応分析を実施した。なお、テキストマイニングでは他の設問と関連する場合は、関連する設題の検定結果で有意差のあるもののうち有意なもの、単独の設問では有意なもののみ提示した。また、量的データは有意差のあるもののみ提示した。

【基礎情報】

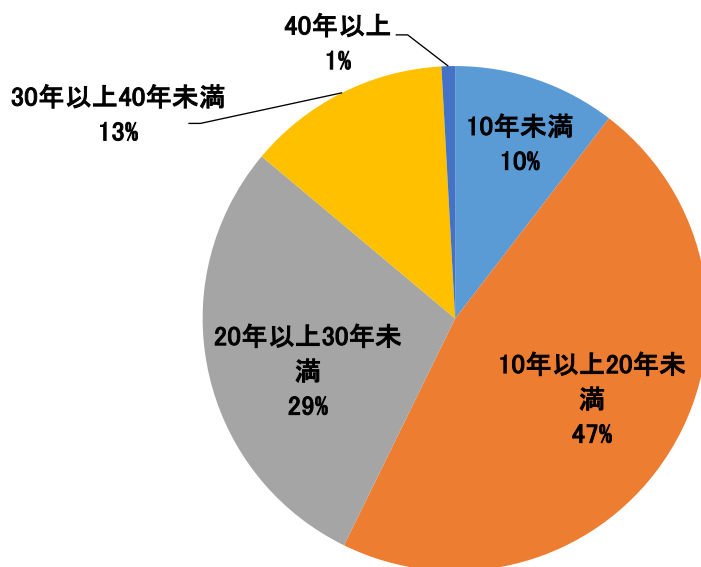
設問1. 主として勤務する施設の種別を教えてください (N=1162)。



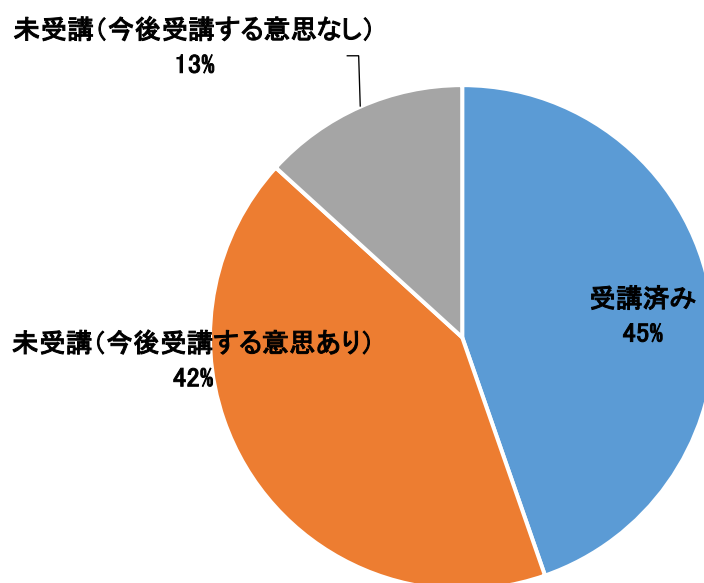
設問 2. 満年齢を教えてください。1つだけマークしてください。(N=1162)



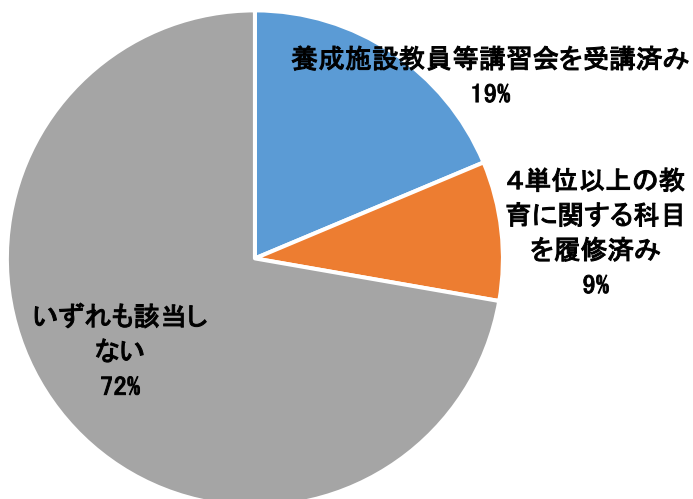
設問 3. 臨床経験年数を教えてください。満 () 年か数値のみを半角で入力してください。(N=1151)



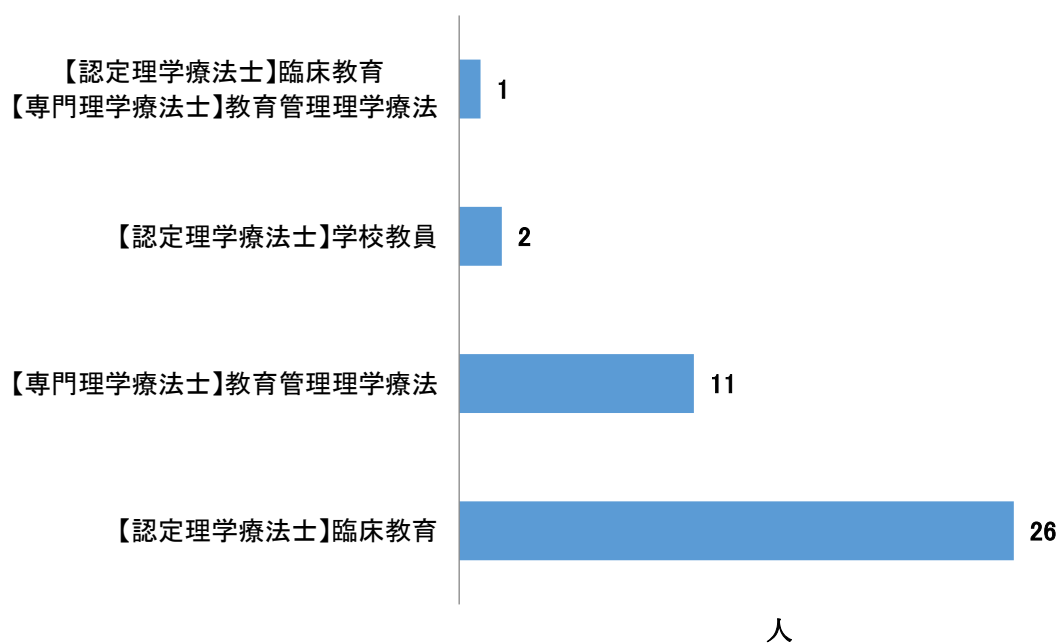
設問 4. 昨年度から始めました「臨床実習指導者講習会」を受講されましたか。(N=1155)



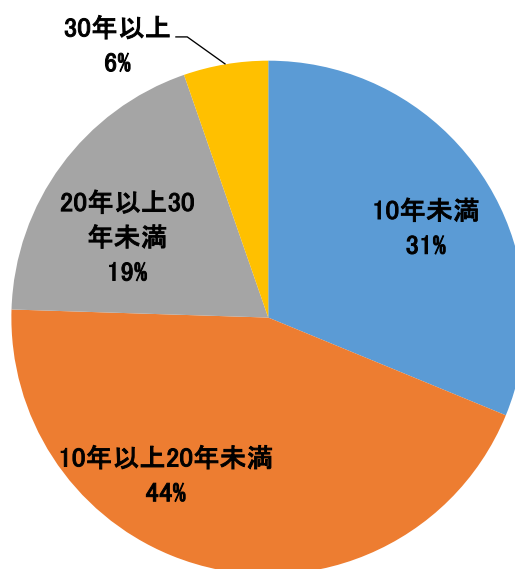
設問 5 以下に該当するものを選択してください。(N=1146)



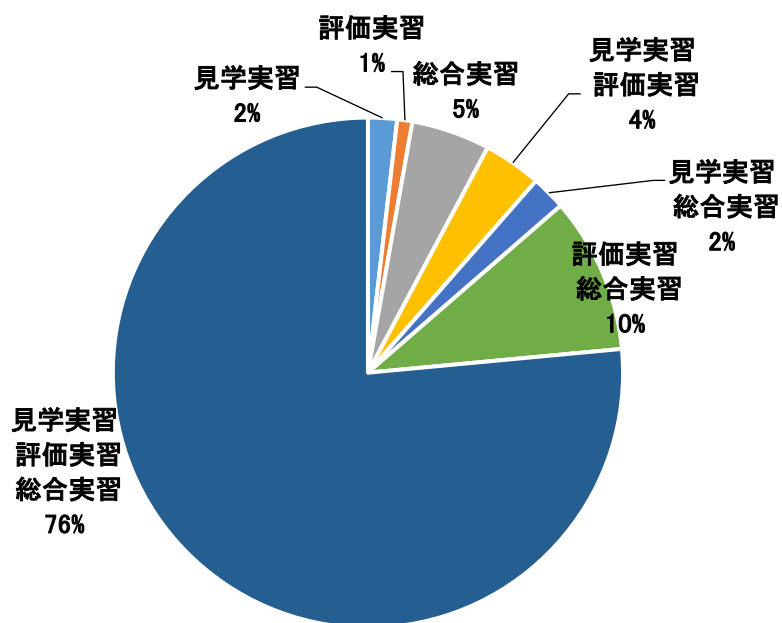
設問 6. 以下の認定資格をお持ちですか。(N=1148)



設問 7. どれくらいの期間、臨床実習に関する指導に携わっておられますか。(N=1147)



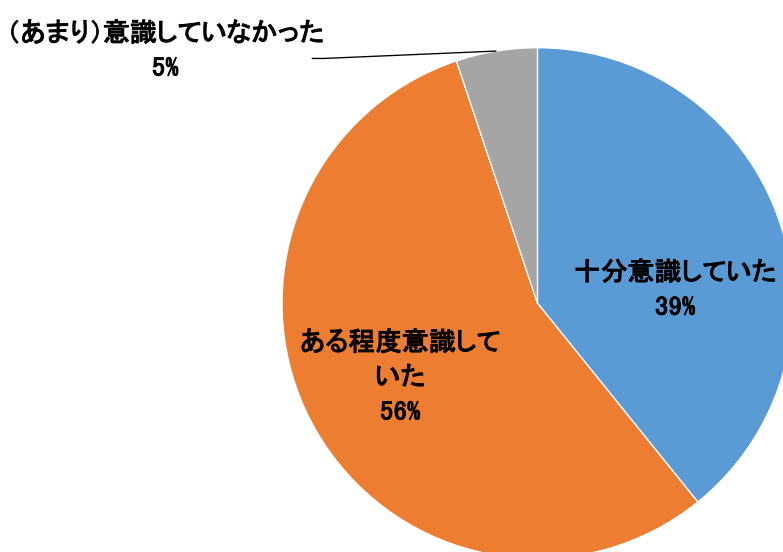
設問 8. どのような臨床実習で指導をされましたか。(N=1144)



【臨床実習全般について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

設問 9. 臨床実習における学生への対応において「学生の能力を引き出すことを助けること」を意識していましたか。(N=1148)



「十分意識していた」と回答した者は、50 歳代 ($\chi^2=17.96$)、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=17.60$) および認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=7.80$) で多かった。

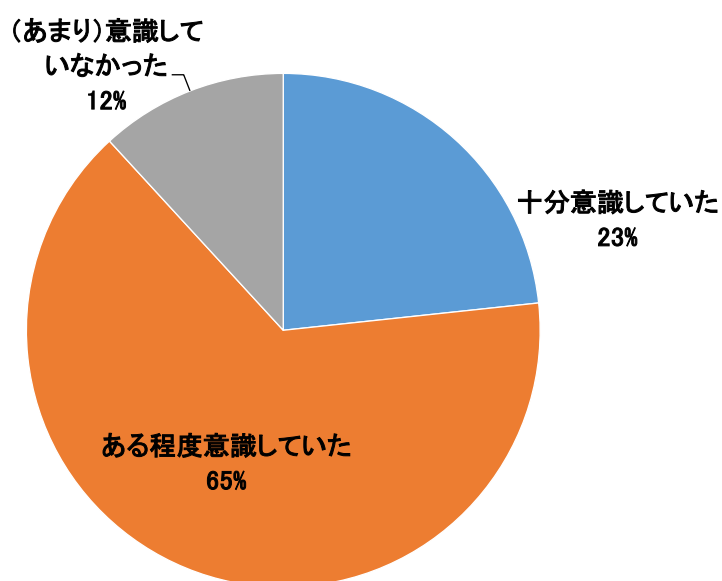
「ある程度意識していた」と回答した者は、教育関連領域の単位・講義のいずれも該当しない者 ($\chi^2=17.60$) および認定・専門理学療法士いずれも持っていない者 ($\chi^2=7.80$) で多かった。

「(あまり)意識していなかった」と回答した者は、40 歳代であった ($\chi^2=17.96$)。

【回答別の比較】

「十分意識していた」は「ある程度意識していた」よりも、臨床経験年数 ($F(2, 1134) = 5.23$) および臨床実習指導経験年数 ($F(2, 1130) = 16.84$) が長い者が多かった。

設問 10. 臨床実習における学生への対応において「学力の形成」を意識していましたか。
(N=1150)

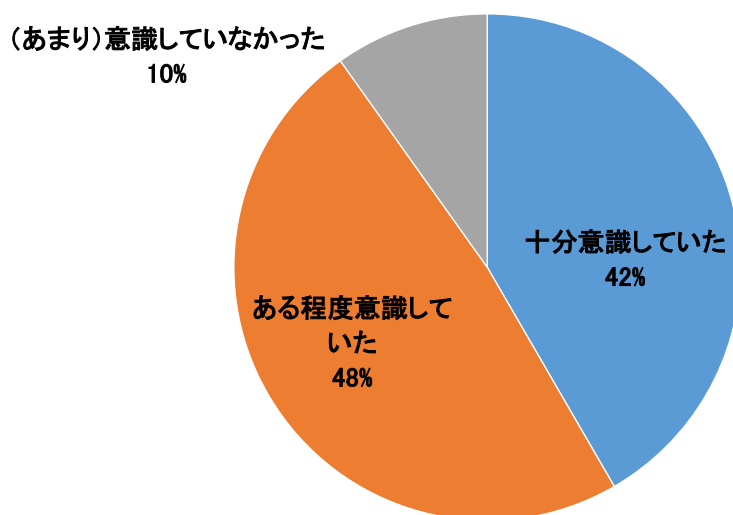


「十分意識していた」と回答した者は、50歳代と60歳代以上 ($\chi^2=17.46$)、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=10.08$)、および、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=9.45$) で多かった。

【回答別の比較】

「十分意識していた」は「ある程度意識していた」よりも臨床経験年数が長い者が多く ($F(2, 1136) = 3.70$)、さらに、「ある程度意識していた」「(あまり)意識していなかった」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1132) = 8.14$)。

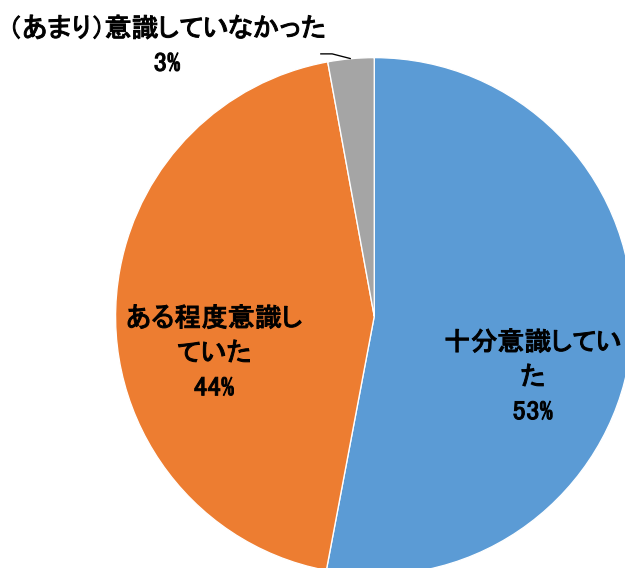
設問 11. 臨床実習における学生への対応において「人間力の形成」を意識していましたか。
(N=1148)



【回答別の比較】

「十分意識していた」は「ある程度意識していた」「(あまり)意識していなかった」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1130) = 5.23$)。

設問 12. 臨床実習指導中のご自身の「立ち居振る舞い」について、学生を指導する立場にあるということを意識していましたか。(N=1146)

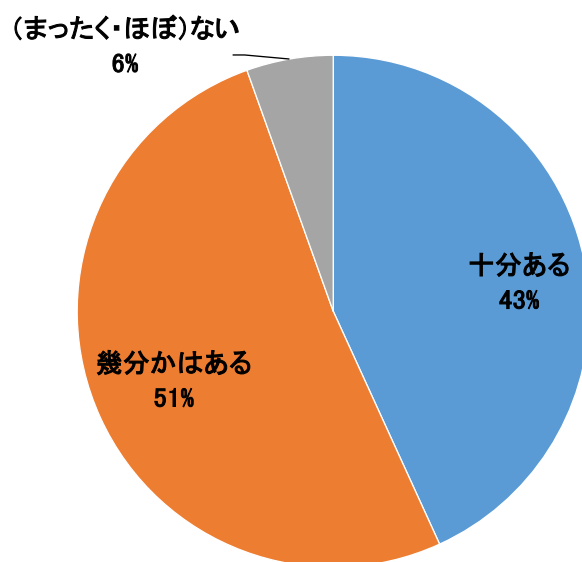


「ある程度意識していた」と回答した者は、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会を受講済みの者が多かった ($\chi^2=16.75$)。

【回答別の比較】

「十分意識していた」は「ある程度意識していた」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1128) = 4.91$)。

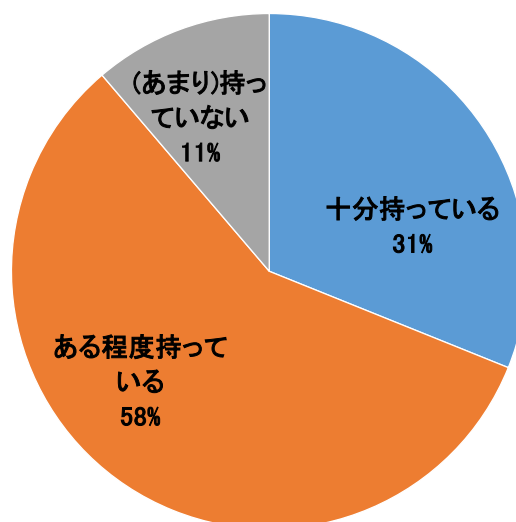
設問 13. 学生の卒業後の立ち居振る舞いの「臨床実習（教育）の責任」についてどのように思いますか。(N=1151)



【回答別の比較】

「十分ある」は「幾分かはある」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1133) = 2.70$)。

設問 14. 臨床実習指導において、理学療法士養成教育に携わる「教育者」としての意識をお持ちですか。(N=1148)



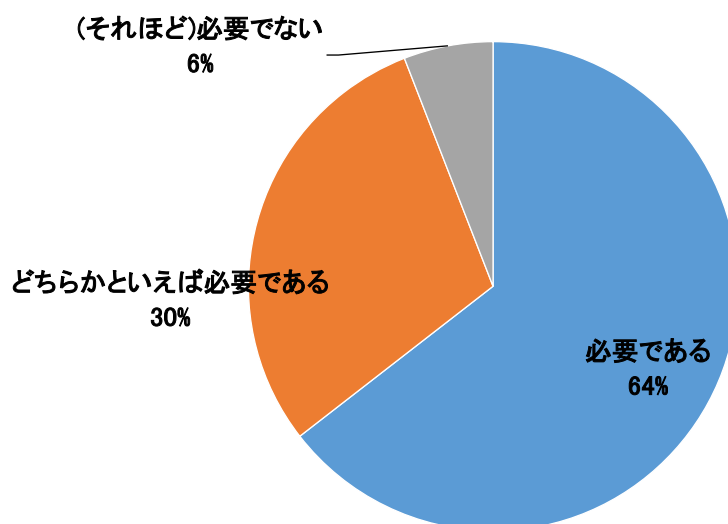
「十分持っている」と回答した者は、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=9.98$)、および、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=13.62$) で多かった。

【回答別の比較】

「十分持っている」は「ある程度持っている」「(あまり)持っていない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1130) = 11.34$)。

「ある程度持っている」群では「(あまり)持っていない」群よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1130) = 11.34$)。

設問 15. 臨床実習指導者の指導能力向上のための「教育水準の確保」の必要性についてどのように思われますか。(N=1152)

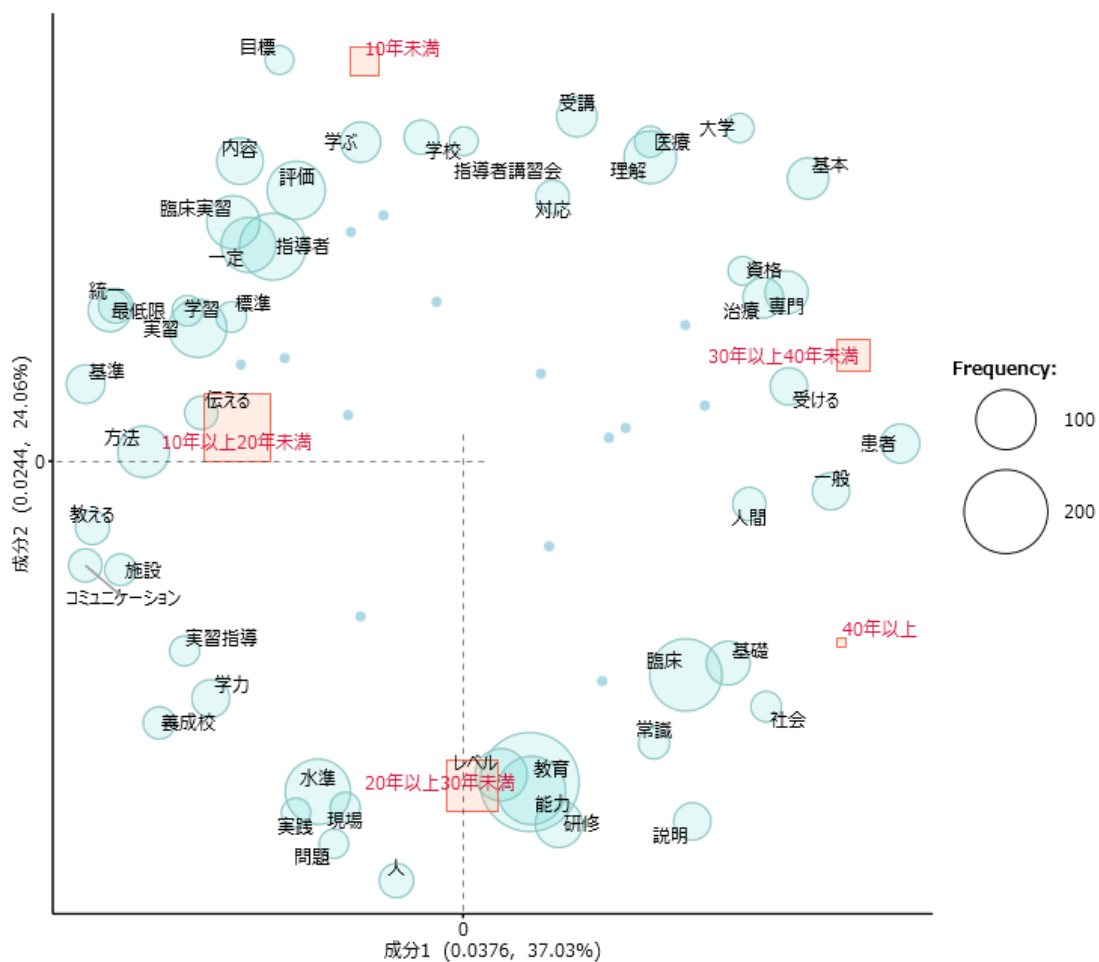


「必要である」と回答した者は、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者で多かった ($\chi^2=11.58$)。

【回答別の比較】

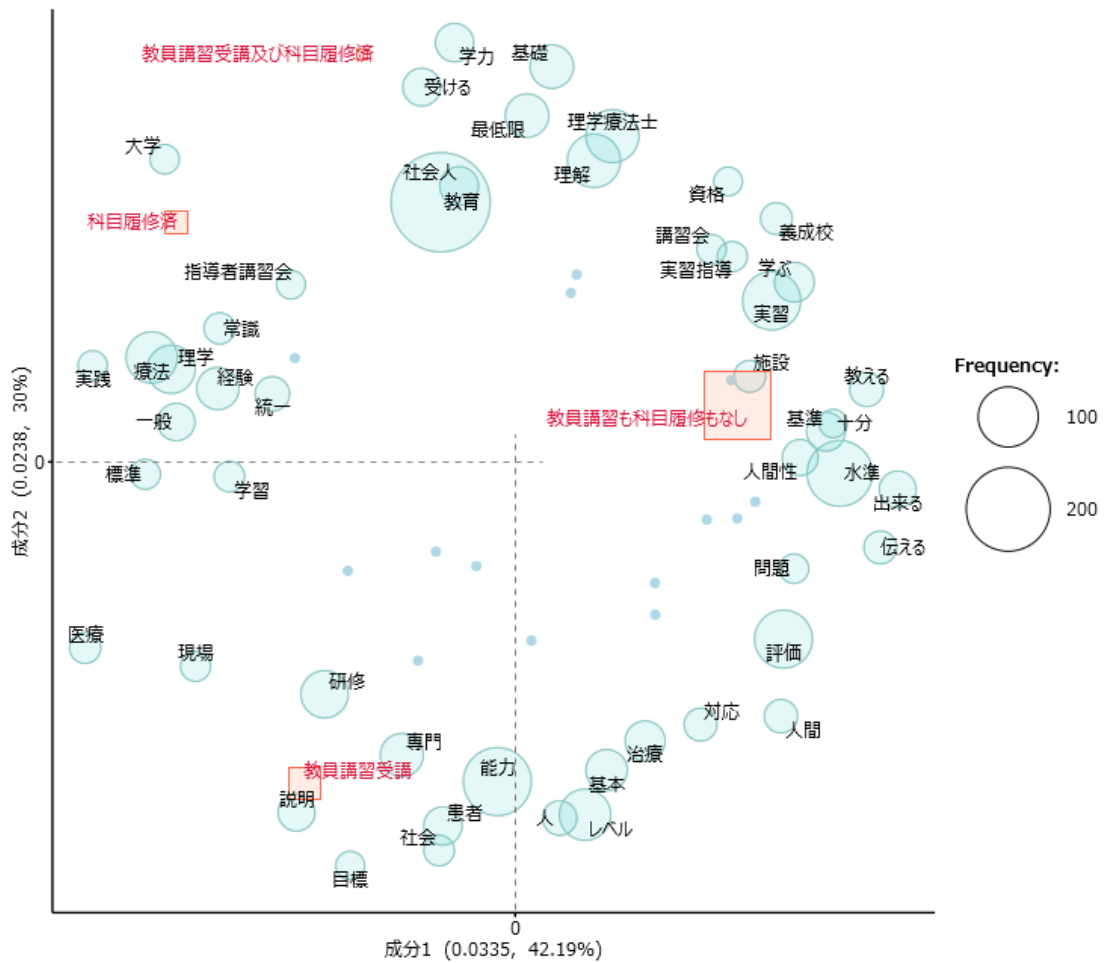
「必要である」は「(それほど)必要でない」よりも臨床経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1138) = 5.81$)。また、「必要である」は「どちらかといえば必要である」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1134) = 4.13$)。

設問 16. 臨床実習指導者の指導能力向上のための「教育水準の確保」の設問で「必要である」、「どちらかという必要である」と回答された方にお聞きます。先生がイメージしている「教育水準」とはどのようなものか教えてください。



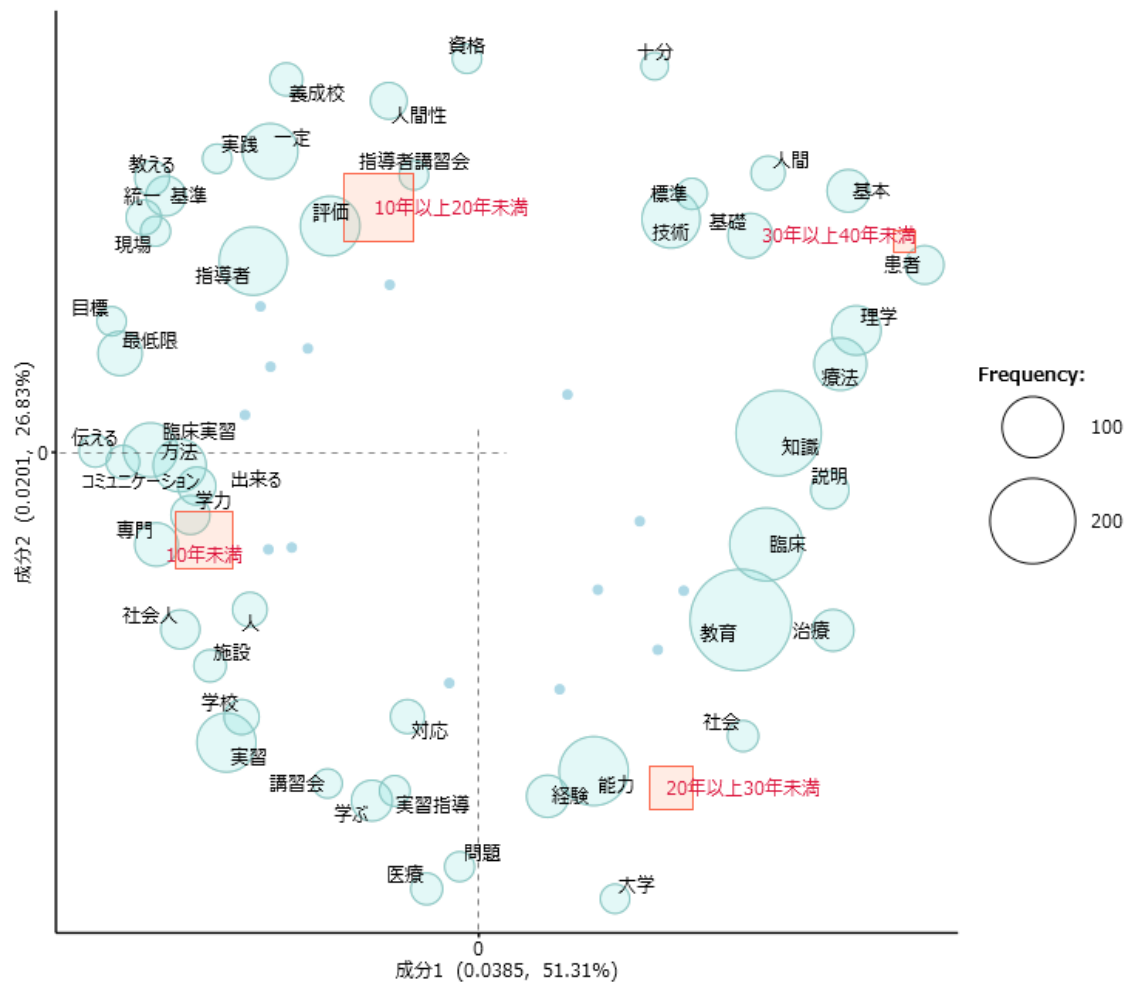
設問 16-1 教育水準のイメージと臨床経験年数の対応分析 (N=932)

10年以上20年未満の者は臨床実習指導者から学生に「伝える」ことをイメージしていた。また、20年以上30年未満では指導者や学生の「教育」や「能力」の「レベル」をイメージしていた。



設問 16-2 教育水準のイメージと教員講習会ないし教育学の科目履修の有無の対応分析 (N=932)

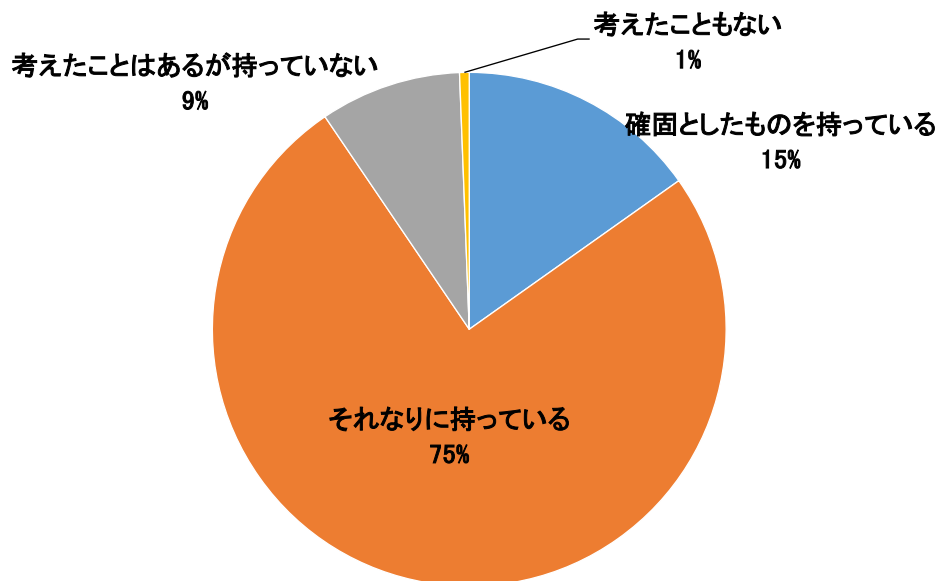
教員講習会のみを受講した者では学生が理学療法過程について説明することや、自身が学生指導にあたり事象を説明するなど「説明」をイメージしていた。また、教員講習会も教育科目の履修もしていない者は「施設」によって違いがあるものとイメージしていた。



設問 16-3 教育水準のイメージと臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=932)

10年未満の者は「専門」職としてのあるいは「専門」的な知識の「学力」を、10年以上20年未満の者は「臨床実習指導者講習会」と学生の評価あるいは理学療法評価などの「評価」をイメージしていた。また、30年以上40年未満の者は「患者」との関連からイメージしていた。

設問 17. 「理学療法士の理想像」をお持ちですか。(N=1159)



「確固としたものを持っている」と回答した者は、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=17.98$)、および、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=9.96$) で多かった。

「それなりに持っている」と回答した者は、教育関連領域の単位・講義のいずれも該当しない者 ($\chi^2=9.96$)、および、認定・専門理学療法士いずれも持っていない者 ($\chi^2=9.96$) で多かった。

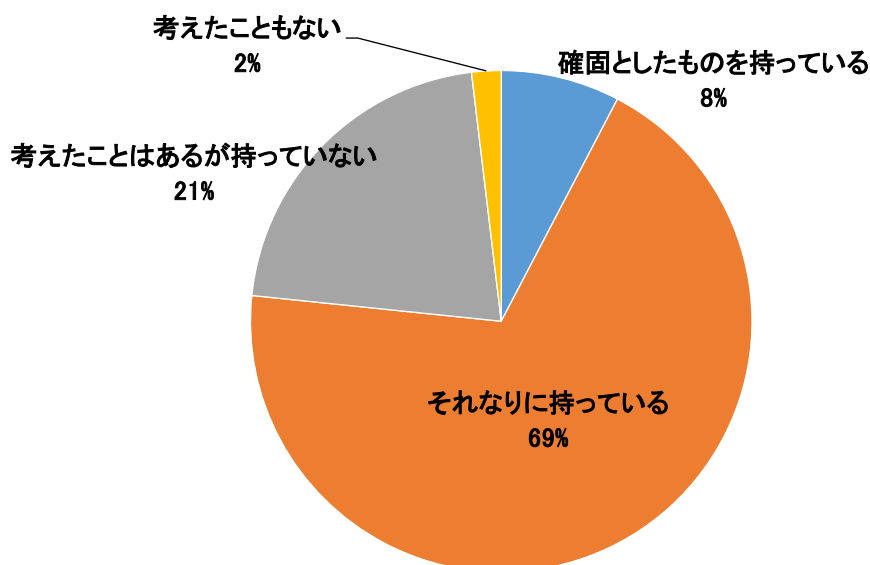
「考えたことはあるが持っていない」と回答した者は、介護施設で務める者で多かった ($\chi^2=16.98$)。

【回答別の比較】

「確固としたものを持っている」は「考えたことはあるが持っていない」よりも臨床経験年数 ($F(3,1144)=4.75$) や臨床実習指導経験年数 ($F(3,1140)=10.52$) が長い者が多かった。

「それなりに持っている」は「考えたことはあるが持っていない」よりも臨床経験年数 ($F(3,1144)=4.75$) や臨床実習指導経験年数 ($F(3,1140)=10.52$) が長い者が多かった。

設問 18. 「理想の臨床実習指導者像」を持っていますか。(N=1160)



「確固としたものを持っている」と回答した者は、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=18.33$)、および、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=47.58$) で多かった。

「それなりに持っている」と回答した者は、病院で勤務する者 ($\chi^2=27.80$)、および、50 歳代 ($\chi^2=23.49$)、臨床実習指導者講習会受講済みの者 ($\chi^2=23.40$)、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=19.29$) で多かった。

「考えたことはあるが持っていない」と回答した者は、介護施設で勤務する者、および、訪問・デイで勤務する者 ($\chi^2=27.80$)、20 歳代 ($\chi^2=23.49$)、認定・専門理学療法士いずれも持っていない者 ($\chi^2=47.58$)、総合実習受けていない施設の者は ($\chi^2=19.29$) で多かった。

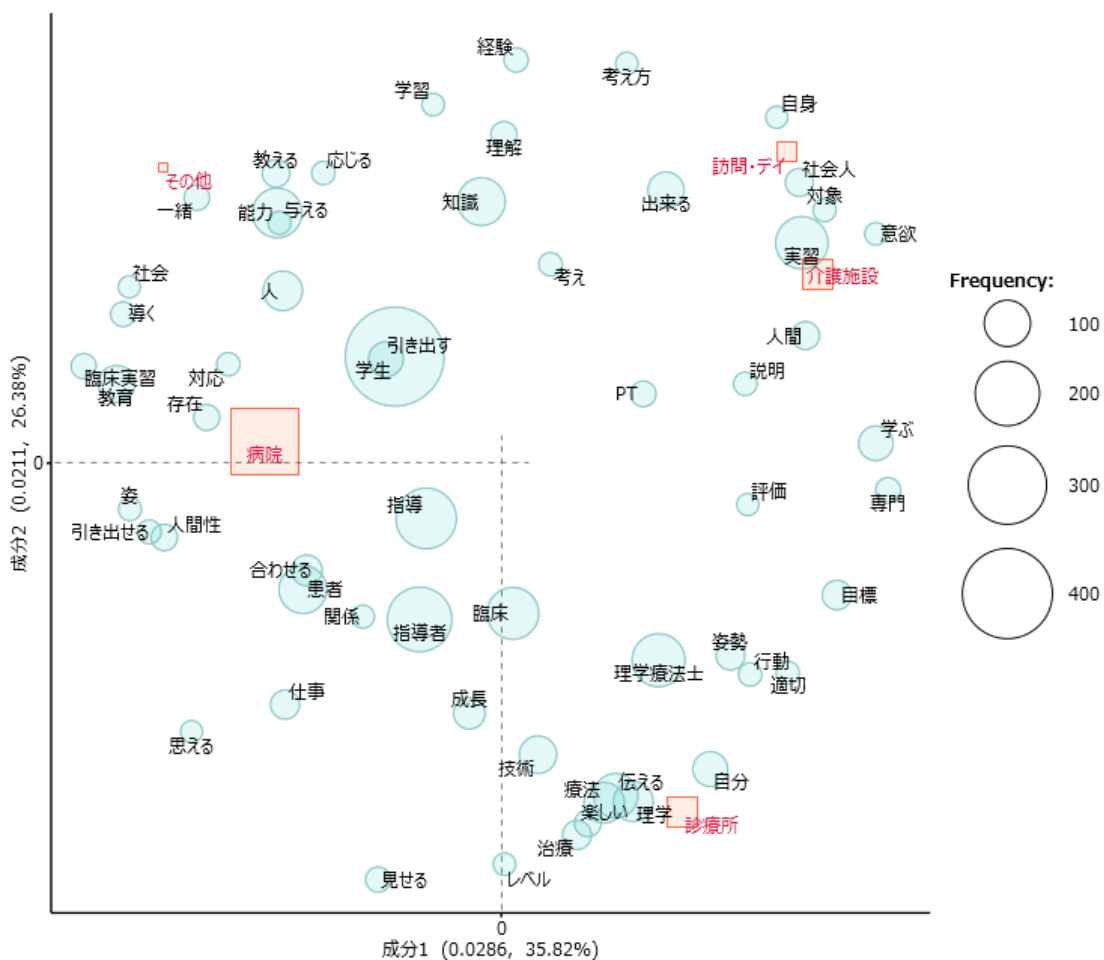
なお、臨床実習指導者講習会未受講(今後受講する意思なし)の者は「考えたことはあるが持っていない」「考えたこともない」が多かった ($\chi^2=23.40$)。

【回答別の比較】

「確固としたものを持っている」は「考えたことはあるが持っていない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3,1141)=18.05$)。

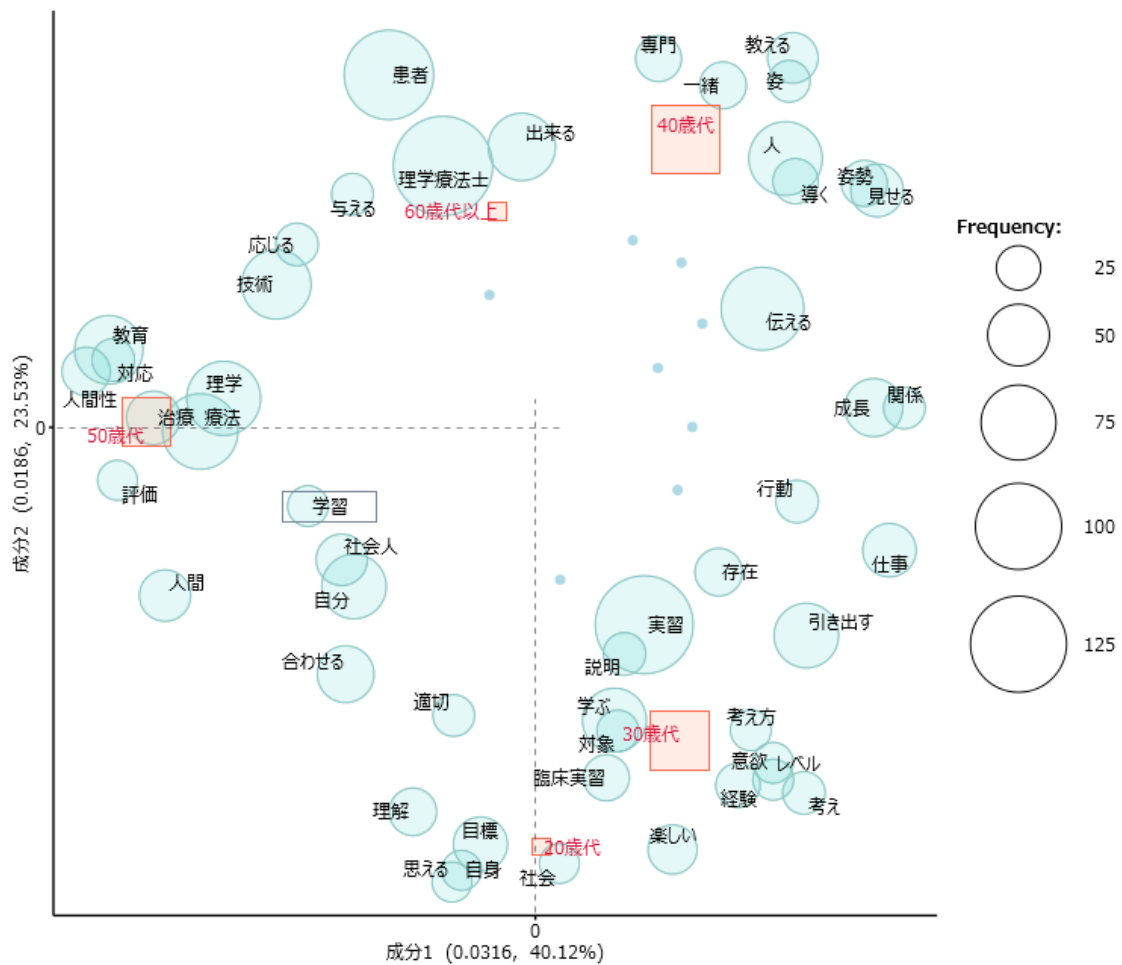
「それなりに持っている」は「考えたことはあるが持っていない」よりも臨床経験年数 ($F(3,1145)=5.83$) や臨床実習指導経験年数 ($F(3,1141)=18.05$) が長い者が多かった。

設問 19. 「理想の臨床実習指導者像」について、「確固としたものを持っている」「それなりに持っている」と回答した方にお聞きます。理想的な臨床実習指導者像とはどのようなものかを教えてください。



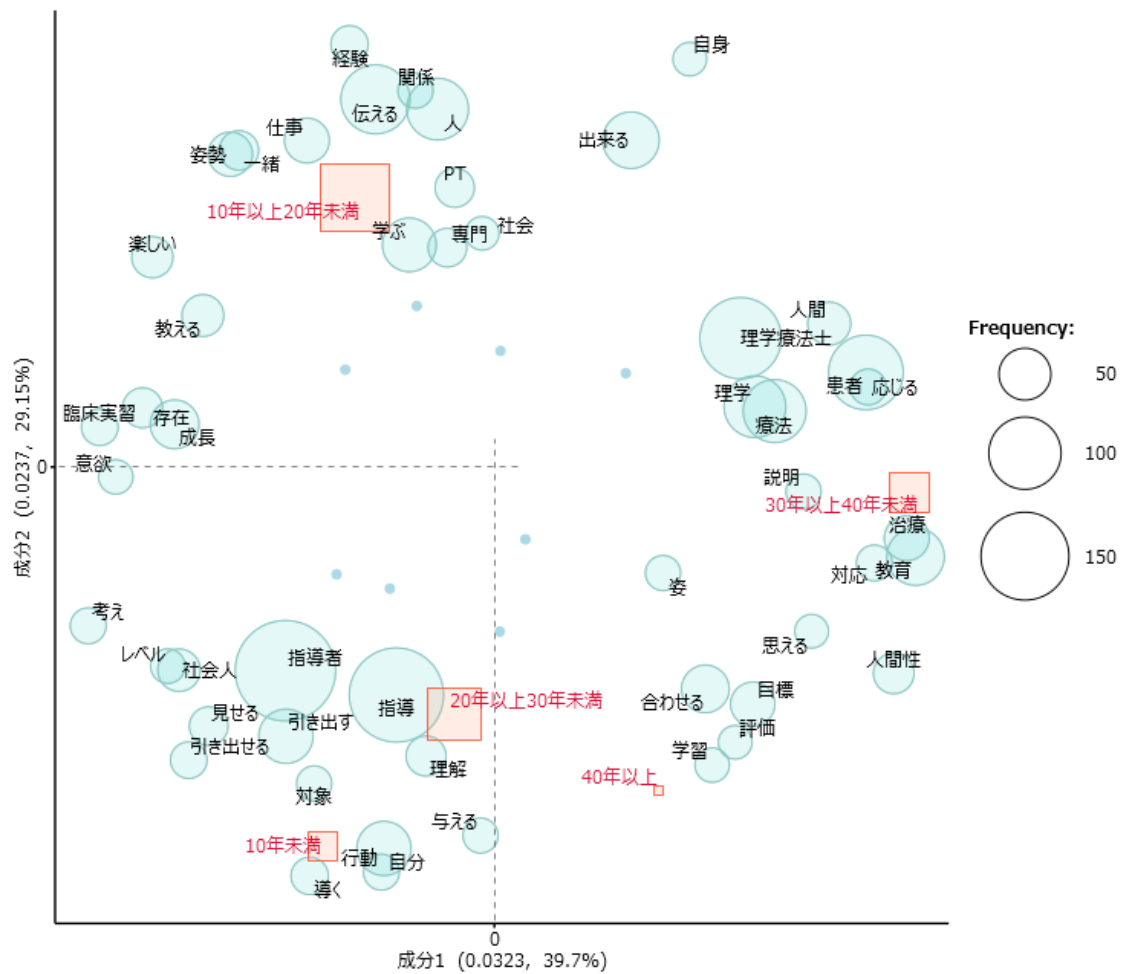
設問 19-1 理想の臨床実習指導者像と施設種別の対応分析 (N=763)

介護施設では実習生を導くことや手本となるなど「実習」をキーワードとした理想像をもっていた。



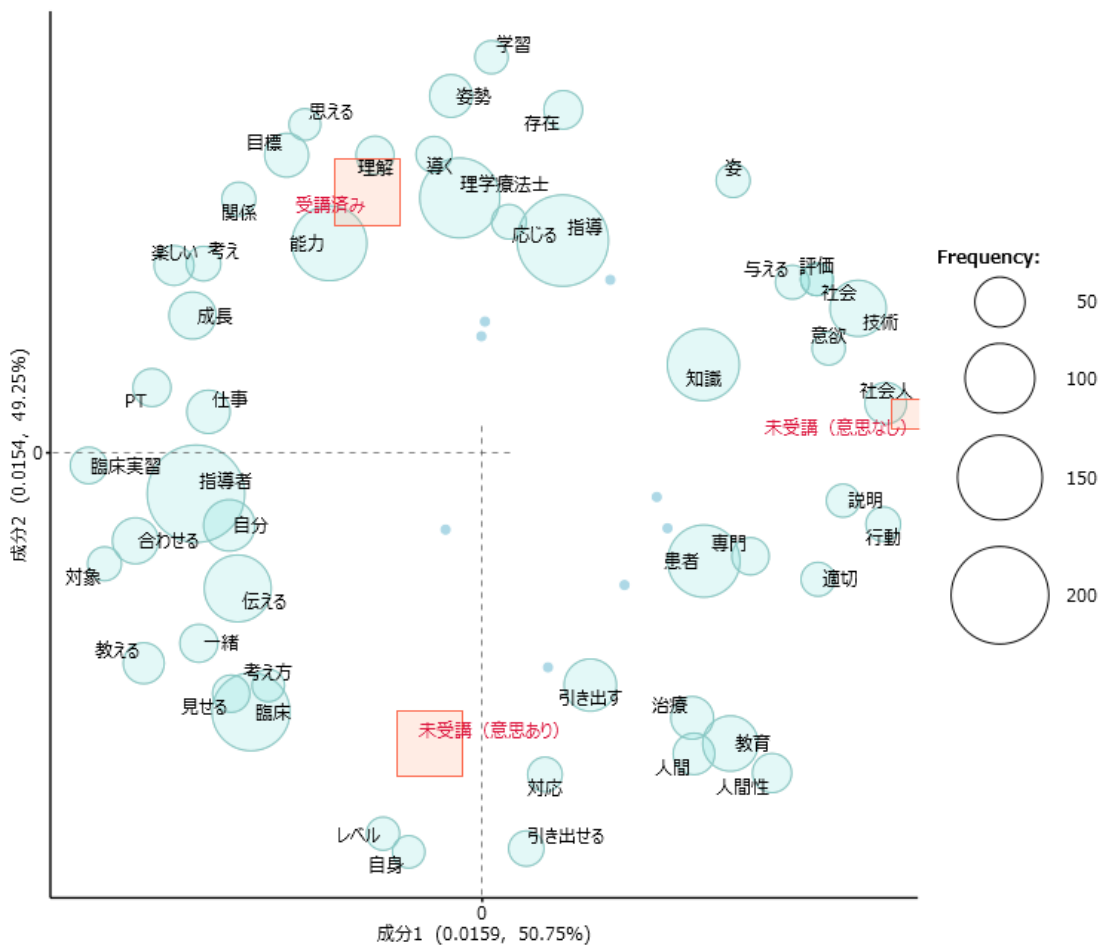
設問 19-2 理想の臨床実習指導者像と年齢の対応分析 (N=763)

20 歳代では社会性や社会人など「社会」をキーワードとし、40 歳代では学生と「一緒に」に考えたり学ぶことを理想像としていた。また、50 歳代では「療法」士として「治療」ができることを理想像としていた。



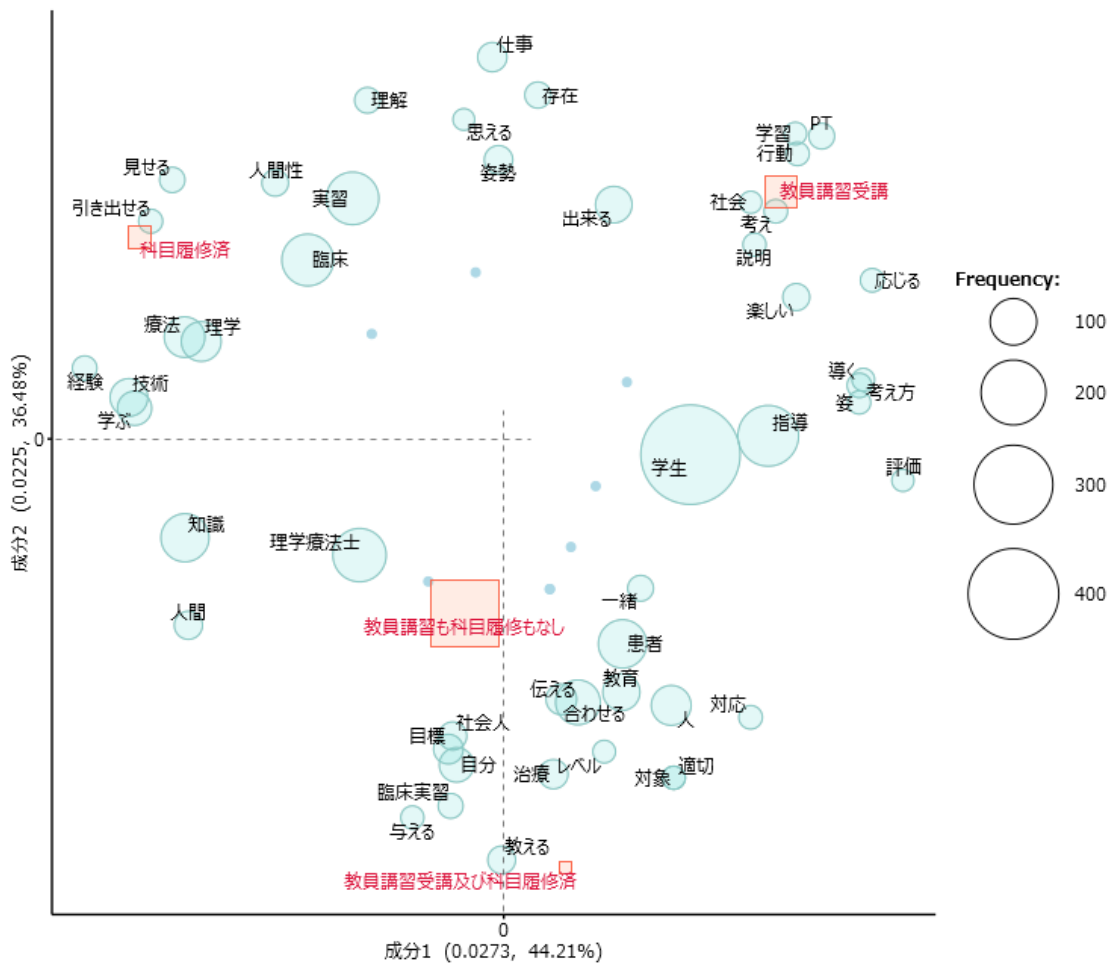
設問 19-3 理想の臨床実習指導者像と臨床経験年数の対応分析 (N=763)

10年未満では学生を「導く」、10年以上20年未満では学生が「学ぶ」ことを促進できることを理想像としていた。また、20年以上30年未満では学生を「理解」した上での「指導」できることを理想像としていた。



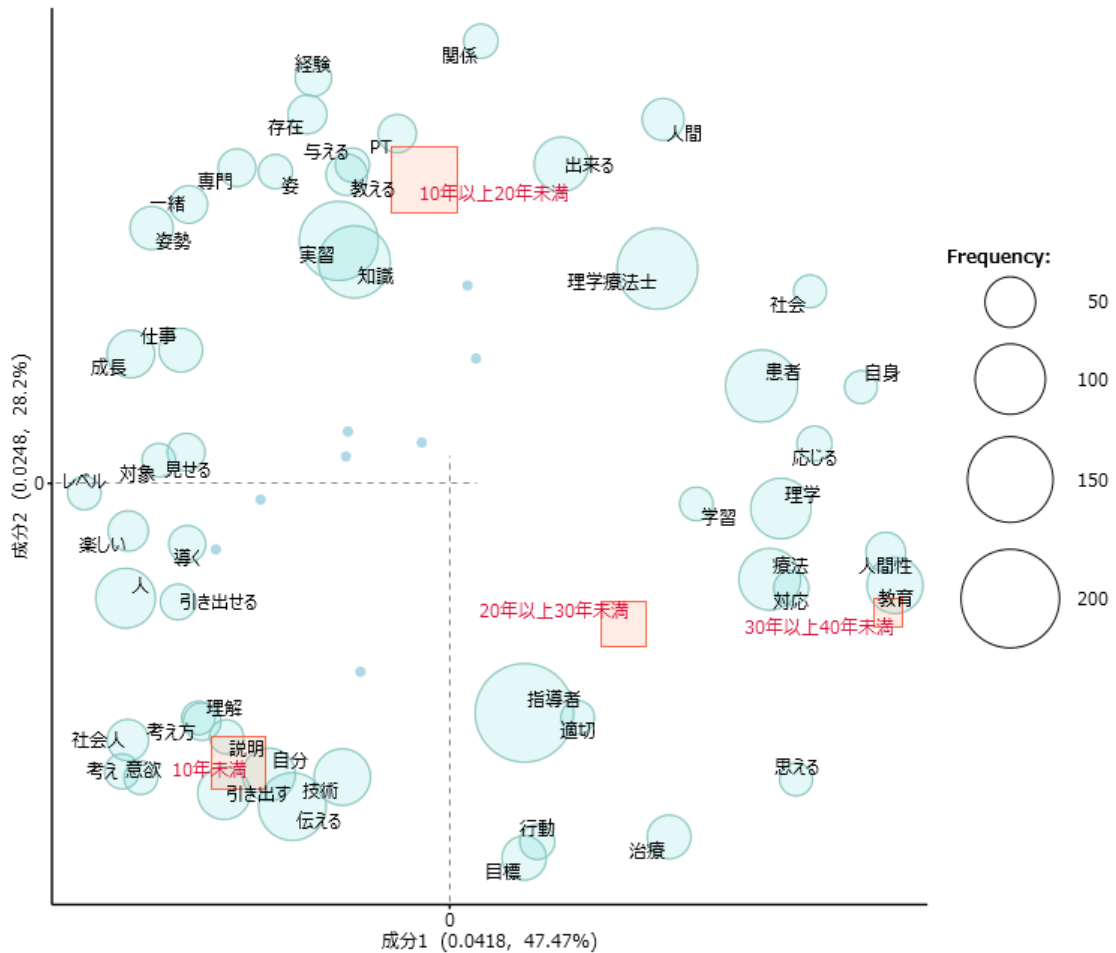
設問 19-4 理想の臨床実習指導者像と臨床実習指導者講習会受講の有無の対応分析 (N=763)

臨床実習指導者講習会の受講者では学生の「能力」を「理解」していることを理想像としていた。一方、今後受講する意思がない未受講者では、「社会人」としてのモラルがあることを理想像としていた。



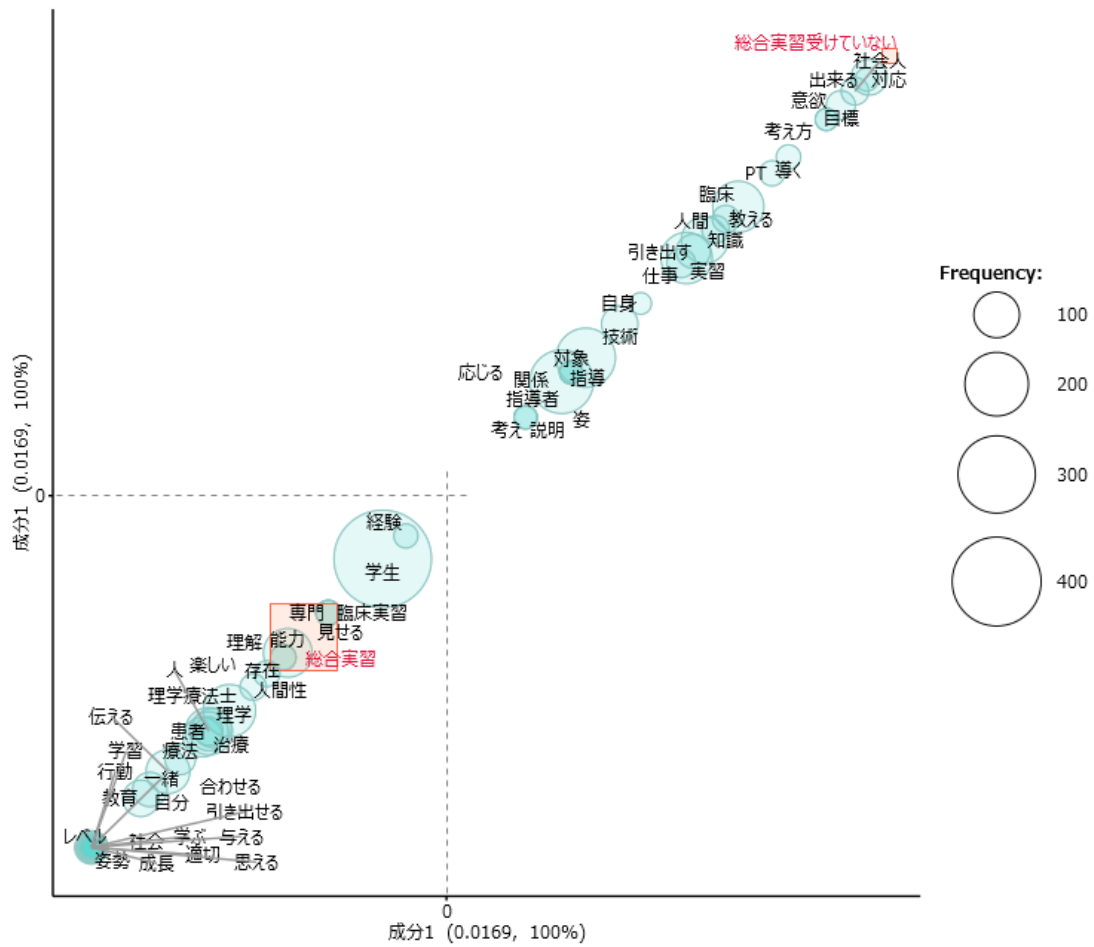
設問 19-5 理想の臨床実習指導者像と教員講習会ないし教育学の科目履修の有無の対応分析 (N=763)

教員講習会のみを受講者では学生の「考え」を導いたり指導者自身の「考え」を押し付けたりしないことを理想像としていた。また、科目履修のみの者では学生の能力を「引き出す」ことを理想像としていた。



設問 19-6 理想の臨床実習指導者像と臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=763)

10年未満の指導経験者は学生が「自分」で「説明」できるよう「引き出す」ことができることを理想像としていた。また、10年以上20年未満の者は「理学療法士」としての魅力を伝えられること、30年以上40年未満の者では、「教育」の視点を持った指導者を理想像としていた。



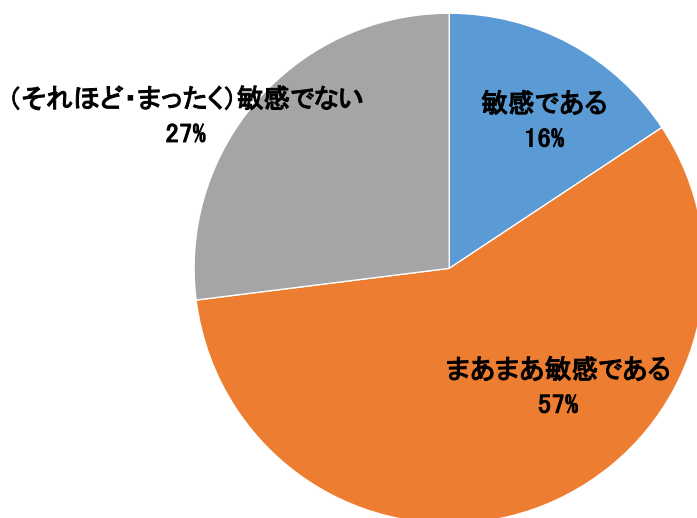
設問 19-7 理想の臨床実習指導者像と実習種別の対応分析 (N=757)

総合実習を受け入れている施設では「臨床実習」で「専門」職として学生に「見せる」ことができ、かつ、学生の「能力」を理解あるいは把握できることを理想像としていた。また、総合実習を受け入れていない施設では「社会人」としての立ち居振る舞いができることを理想像としていた。

【臨床実習を取り巻く「社会の変化」について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

設問 20. 臨床実習教育を取り巻く「社会の変化」のご自身の捉え方について、どのように感じていますか。(N=1160)



「敏感である」と回答した者は、病院で勤務する者 ($\chi^2=28.60$)、大学又は大学院において4単位以上の教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=16.86$)、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=18.10$) で多かった。

「まあまあ敏感である」と回答した者は、50歳代 ($\chi^2=16.46$)、および、臨床実習指導者講習会受講済みの者 ($\chi^2=23.49$)、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会を受講済みの者 ($\chi^2=16.86$) で多かった。

「(それほど・まったく)敏感でない」と回答した者は、介護施設で務める者 ($\chi^2=28.60$)、および臨床実習指導者講習会未受講（今後受講する意思ありなし関係なく）の者 ($\chi^2=23.49$)、教育関連領域の単位・講義のいずれも該当しない者は ($\chi^2=16.86$)、認定・専門理学療法士いずれも持っていない者は ($\chi^2=18.10$) で多かった。

【回答別の比較】

「敏感である」は「(それほど・まったく)敏感でない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1141) = 18.05$)。

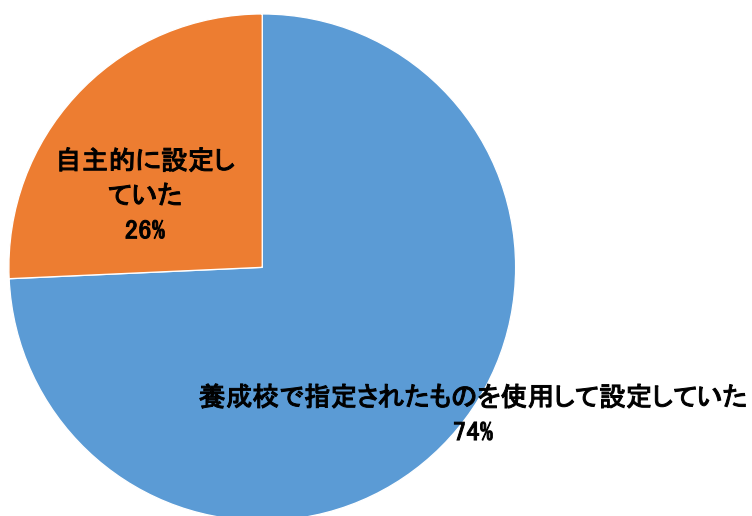
「まあまあ敏感である」は「(それほど・まったく)敏感でない」よりも臨床実習指導経

験年数が長い者が多かった ($F(3, 1141) = 18.05$)。

【臨床実習の指導方法について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

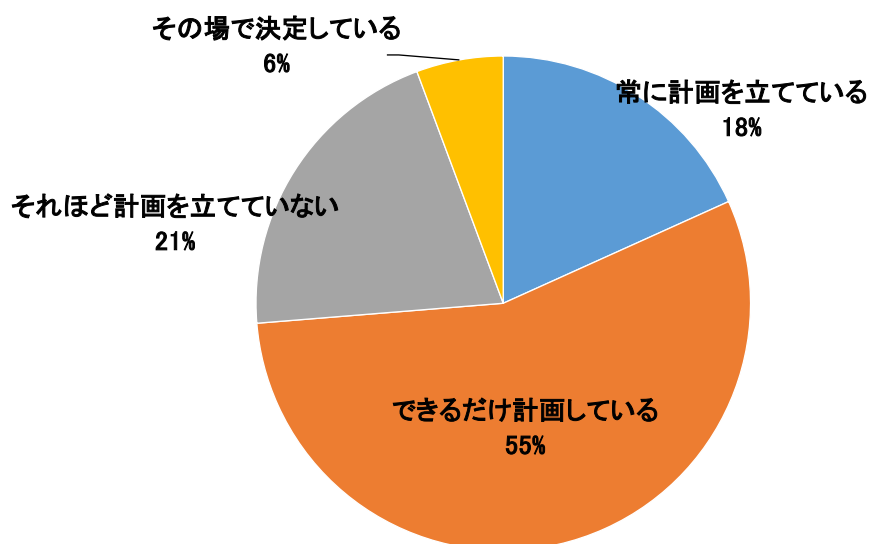
設問 21. 各実習において「指導の目的」を設定していましたか。(N=1085)



「養成校で指定されたものを使用して設定していた」と回答した者は、20 歳代 ($\chi^2=11.47$)、認定・専門理学療法士いずれも持っていない者 ($\chi^2=7.55$) で多かった。

「自主的に設定していた」と回答した者は、50 歳代 ($\chi^2=11.47$)、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=7.55$) で多かった。

設問 22. 各実習の実習内容に応じて「指導計画」を策定していましたか。(N=1145)

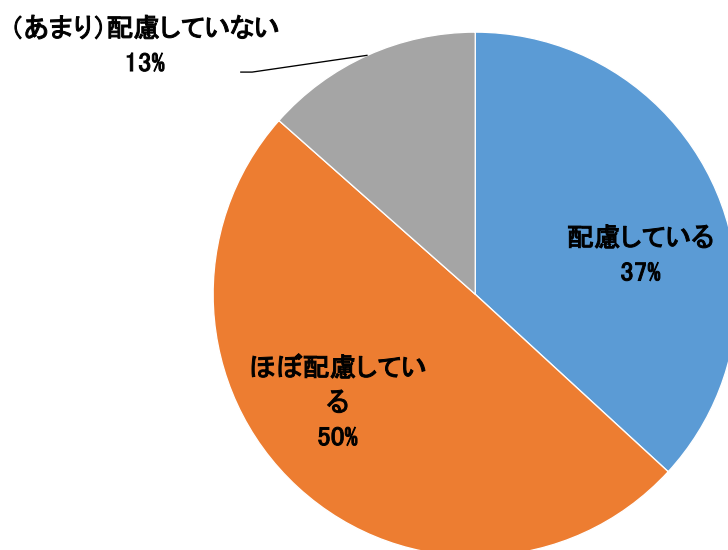


「常に計画を立てている」と回答した者は、認定・専門理学療法士を持っている者が多かった ($\chi^2=22.10$)。

【回答別の比較】

「常に計画を立てている」は「できるだけ計画している」よりも、また、「常に計画を立てている」は「それほど計画を立てていない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3,1126) = 4.64$)。

設問 23. 指導計画を策定する時に、実習生の「学力面」に配慮していますか。(N=1143)



「配慮している」と回答した者は、臨床実習指導者講習会受講済みの者 ($\chi^2=11.90$)、および、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=17.61$) で多かった。

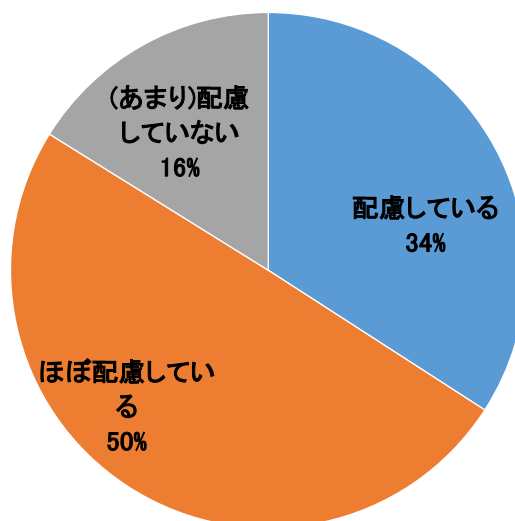
「ほぼ配慮している」と回答した者は、臨床実習指導者講習会未受講（今後受講する意思なし）の者で多かった ($\chi^2=11.90$)。

「(あまり) 配慮していない」と回答した者は、総合実習受けていない施設の者で多かった ($\chi^2=17.61$)。

【回答別の比較】

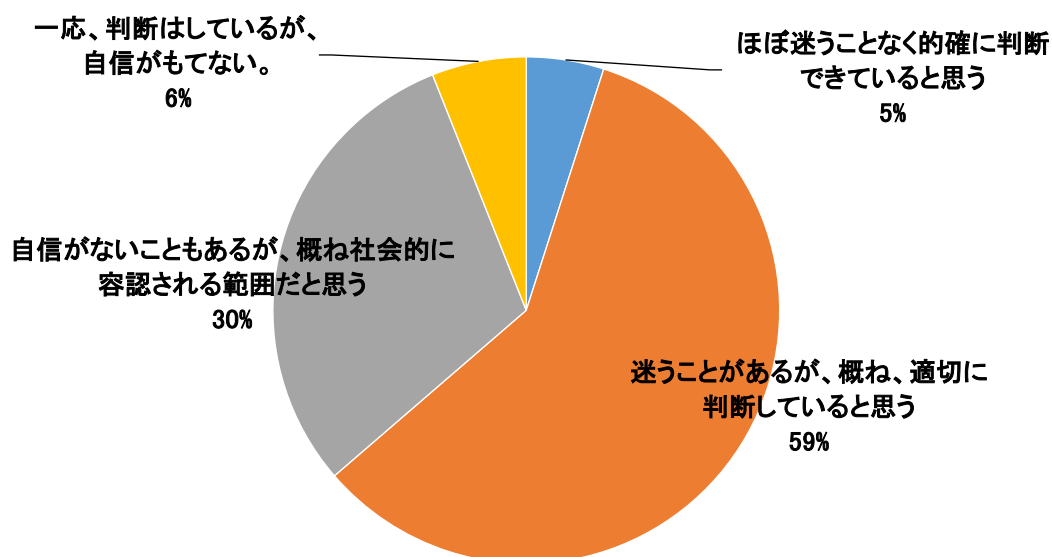
「配慮している」は「ほぼ配慮している」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1126) = 4.82$)。

設問 24. 実習生の「精神発達面」に配慮していますか。(N=1146)



「配慮している」と回答した者は、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=8.45$)、および、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=6.48$) で多かった。

設問 25. 臨床実習教育における実習生の「評定」に関して、あなたが行った「評定」について、どのような認識をお持ちですか。(N=1112)



「ほぼ迷うことなく的確に判断できていると思う」と回答した者は、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会を受講済みの者 ($\chi^2=47.10$)、および、大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=47.10$)、

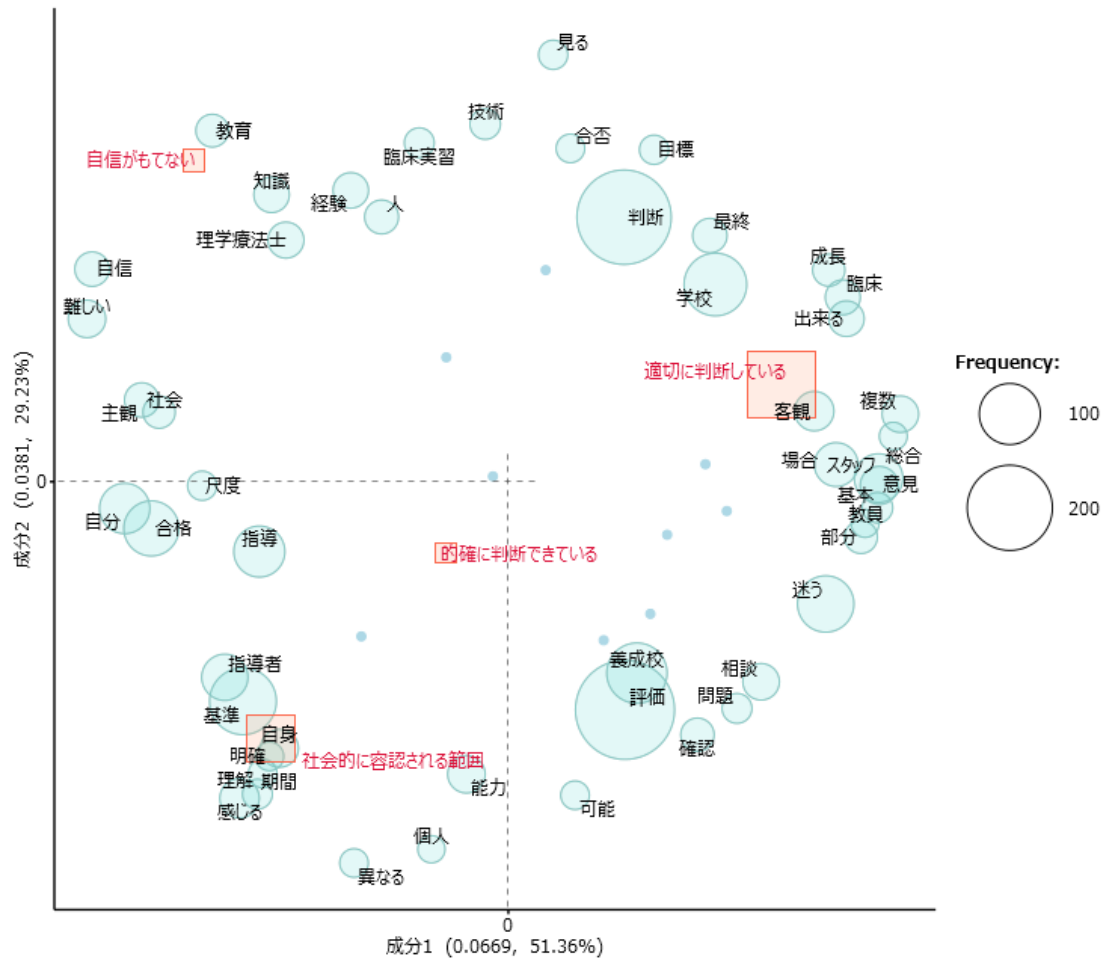
「自信がないこともあるが、概ね社会的に容認される範囲だと思う」と回答した者は、教育関連領域の単位・講義のいずれも該当しない者が多かった ($\chi^2=47.10$)。

【回答別の比較】

「ほぼ迷うことなく的確に判断できていると思う」は「迷うことがあるが、概ね、適切に判断していると思う」よりも臨床経験年数が長い者 ($F(3, 1099) = 4.56$)、および、臨床実習指導経験年数が長い者 ($F(3, 1095) = 8.17$) で多かった。しかも、「ほぼ迷うことなく的確に判断できていると思う」は「自信がないこともあるが、概ね社会的に容認される範囲だと思う」よりも臨床経験年数が長い者 ($F(3, 1099) = 4.56$)、および、臨床実習指導経験年数が長い者 ($F(3, 1095) = 8.17$) で多かった。一方、「ほぼ迷うことなく的確に判断できていると思う」では「一応、判断はしているが、自信がもてない」よりも臨床経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1099) = 4.56$)。

「迷うことがあるが、概ね、適切に判断していると思う」は「自信がないこともあるが、概ね社会的に容認される範囲だと思う」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1095) = 8.17$)。

設問 26. 前問で回答された番号にした理由を具体的に教えてください。

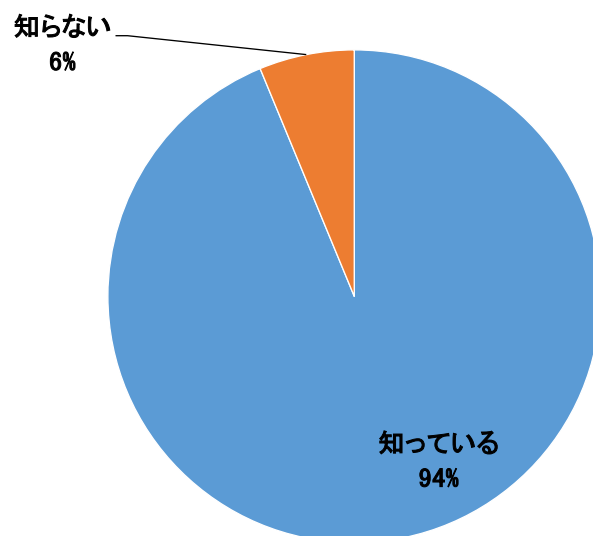


設問 26 臨床実習教育における実習生の評定の的確性とその理由の対応分析 (N=888)

「迷うことがあるが、概ね、適切に判断していると思う」と回答した者は「客観性」の観点から判断していた。「自信がないこともあるが、概ね社会的に容認される範囲だと思う」と回答した者は、「自身」が「明確」に「基準」を「理解」できているか否かで判断していた。

設問 27. 臨床実習の単位取得のための最終評価は養成校が行うことをご存知ですか。

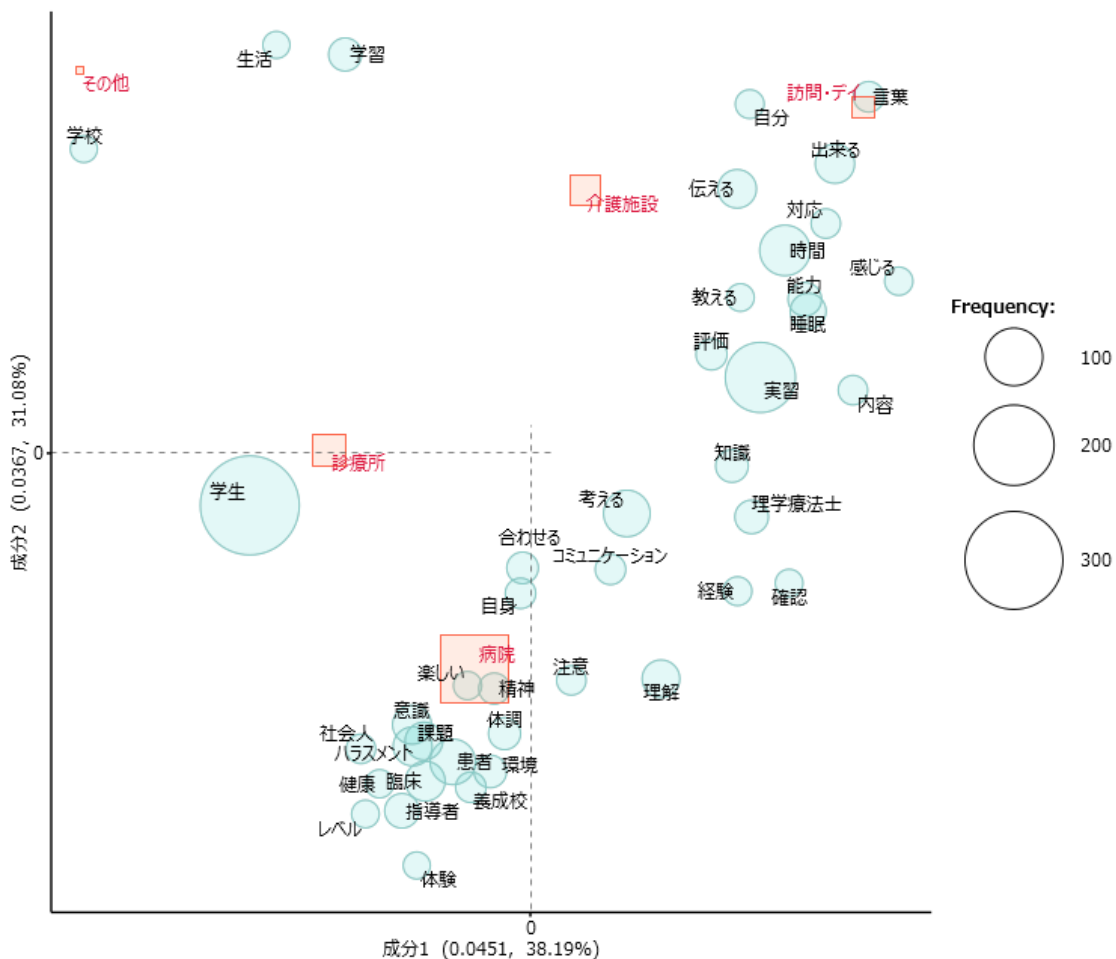
(N=1154)



「知っている」と回答した者は、臨床実習指導者講習会受講済みの者 ($\chi^2=18.28$)、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=11.74$) で多かった。

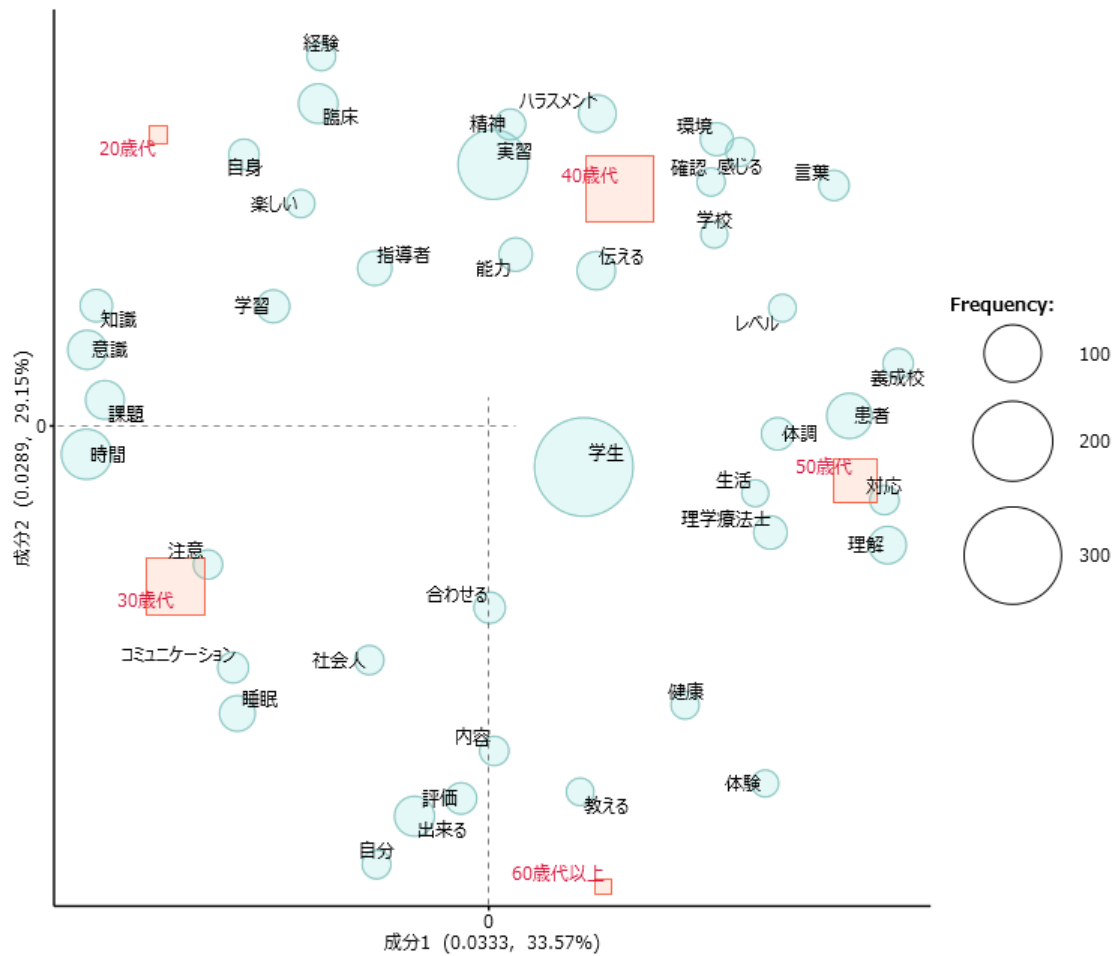
「知らない」と回答した者は、訪問・デイで務める者 ($\chi^2=16.74$)、臨床実習指導者講習会未受講（今後受講する意思なし）の者 ($\chi^2=18.28$)、総合実習受けていない施設の者 ($\chi^2=11.74$) で多かった。

設問 28. そのほか、学生を指導する際に、気を付けたり、心がけている点があれば、教えてください。



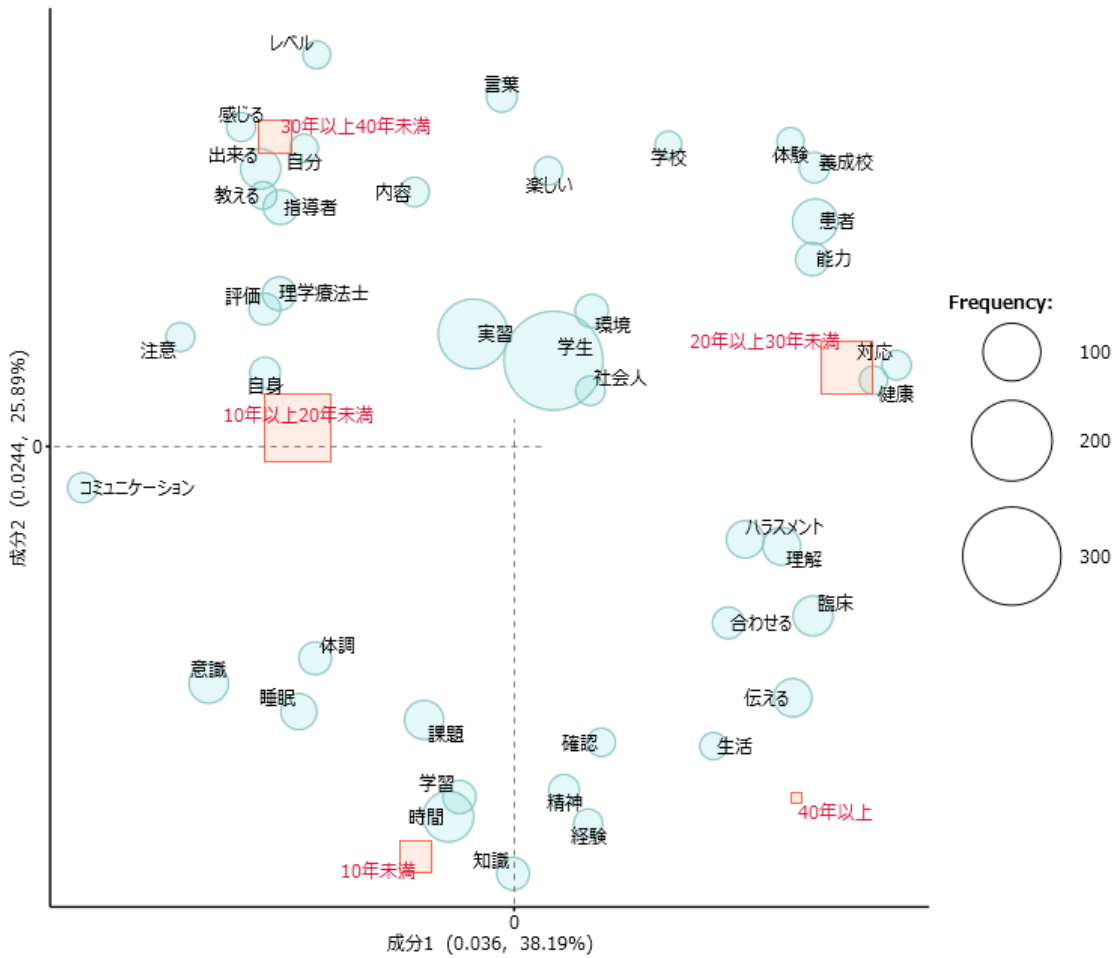
設問 28-1 臨床実習指導上の配慮と施設種別の対応分析 (N=797)

病院では「楽しい」実習であることや、「精神面」の負担などに配慮していた。また、訪問・デイでは「言葉」遣いに配慮していた。



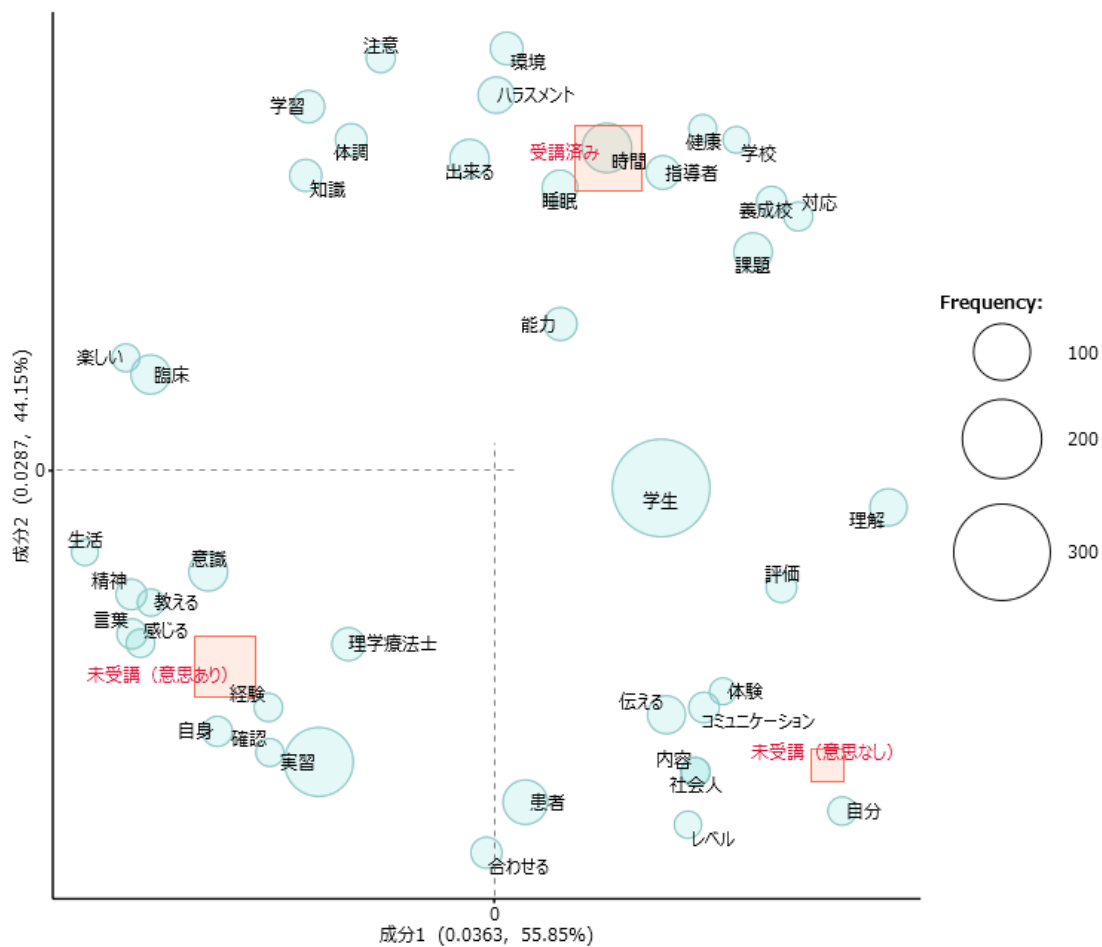
設問 28-2 臨床実習指導上の配慮と年齢の対応分析 (N=803)

30歳代では臨床実習指導者のハラスメントや言動、表情に「注意」しており、50歳代では学生への全般的な「対応」について配慮していた。



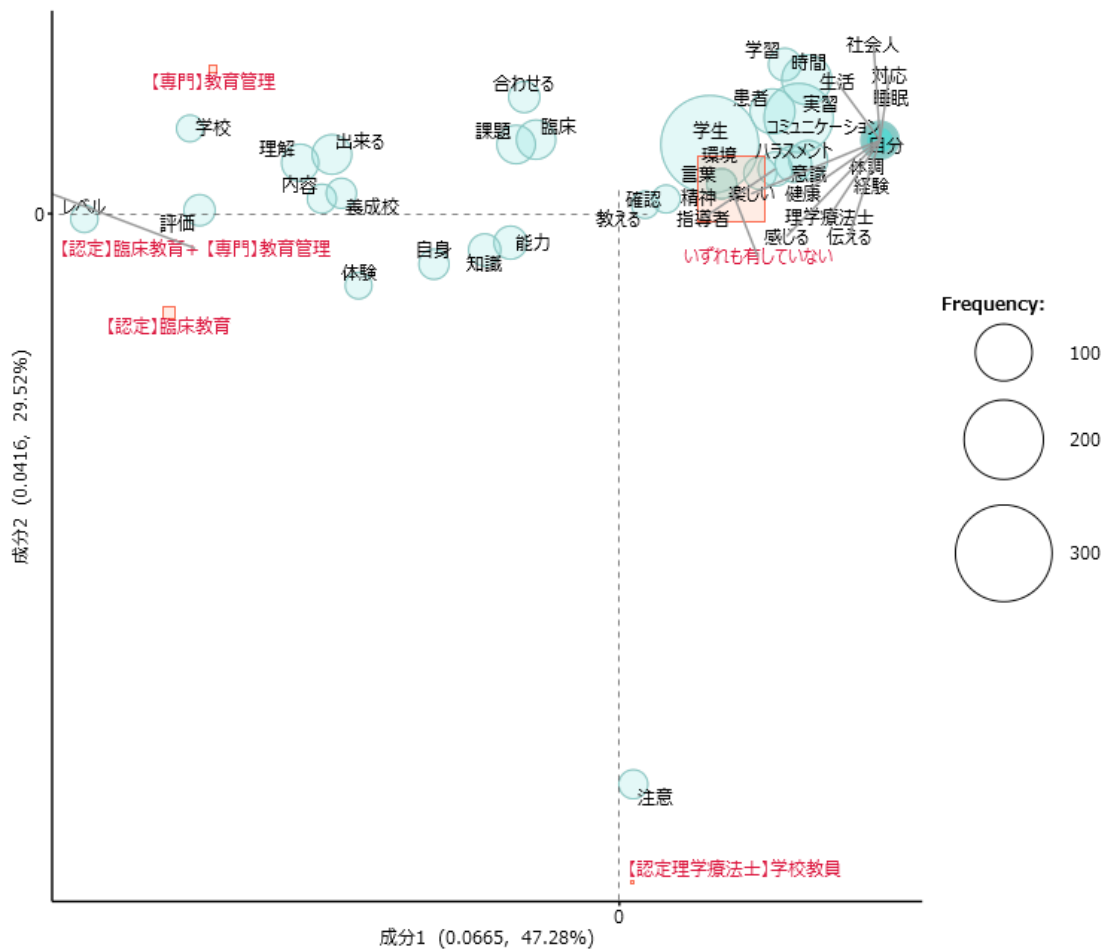
設問 28-3 臨床実習指導上の配慮と臨床経験年数の対応分析 (N=803)

20年以上30年未満では学生の「健康」に、30年以上40年未満では学生が自ら（「自分」）「できる」ことや「感じる」ことに配慮していた。



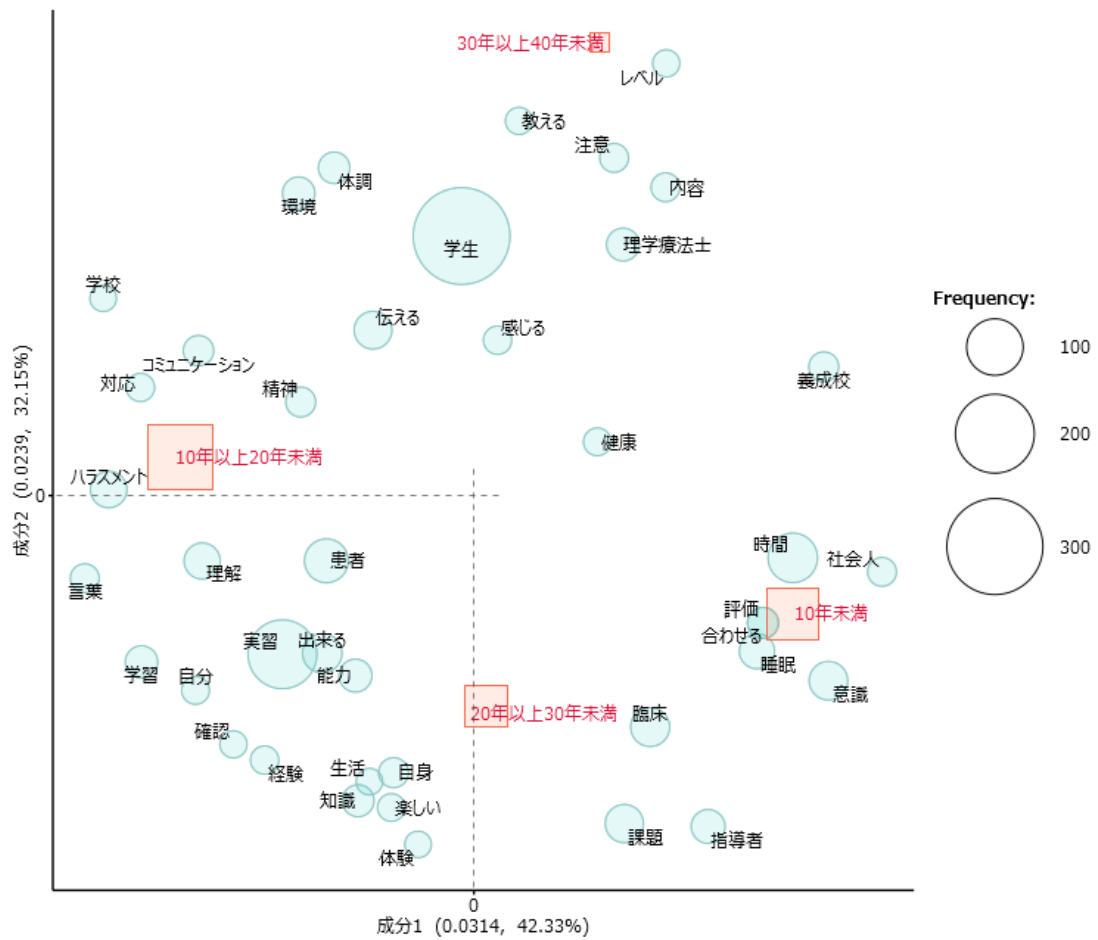
設問 28-4 臨床実習指導上の配慮と臨床実習指導者講習会受講の有無の対応分析 (N=803)

臨床実習指導者講習会の受講者は学生の実習や自己学習、「睡眠」などの「時間」的な側面に配慮していた。



設問 28-5 臨床実習指導上の配慮と認定・専門理学療法士取得の有無との対応分析 (N=803)

専門理学療法士及び認定理学療法士いずれの資格も有していない者は「学生」の「言葉遣い」や「精神」面など「環境」面に配慮するとともに、「指導者」の「ハラスメント」にも配慮していた。



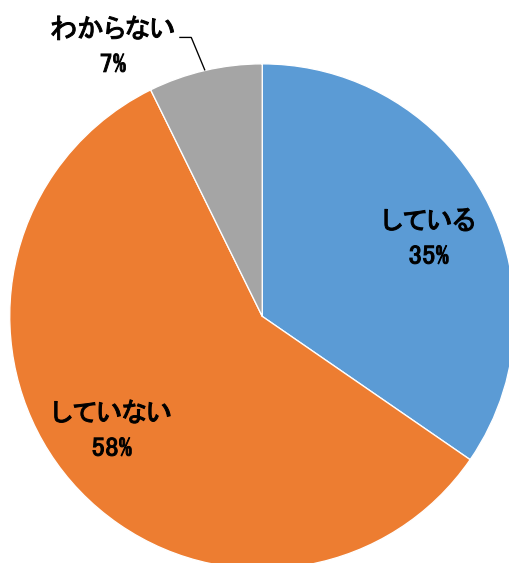
設問 28-6 臨床実習指導上の配慮と臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=803)

10 年未満の指導経験者は学生の能力や理解度に「合わせ」た学生「評価」に配慮していた。

【臨床実習指導に関する状況について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

設問 29. あなたが勤務されている施設では、リハスタッフへの臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みを行っていますか。(N=1153)



「している」と回答した者は、病院で勤務する者 ($\chi^2=53.61$)、臨床実習指導者講習会受講済みの者 ($\chi^2=19.40$)、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会を受講済みかつ大学又は大学院において教育に関する科目を履修済みの者 ($\chi^2=20.30$)、認定・専門理学療法士を持っている者 ($\chi^2=20.13$)、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=11.83$) で多かった。

「していない」と回答した者は、診療所・介護施設で勤務する者 ($\chi^2=53.61$)、臨床実習指導者講習会未受講の者 ($\chi^2=19.40$)、教育関連領域の単位・講義のいずれも該当しない者 ($\chi^2=20.30$)、総合実習受けていない施設の者 ($\chi^2=11.83$) で多かった。

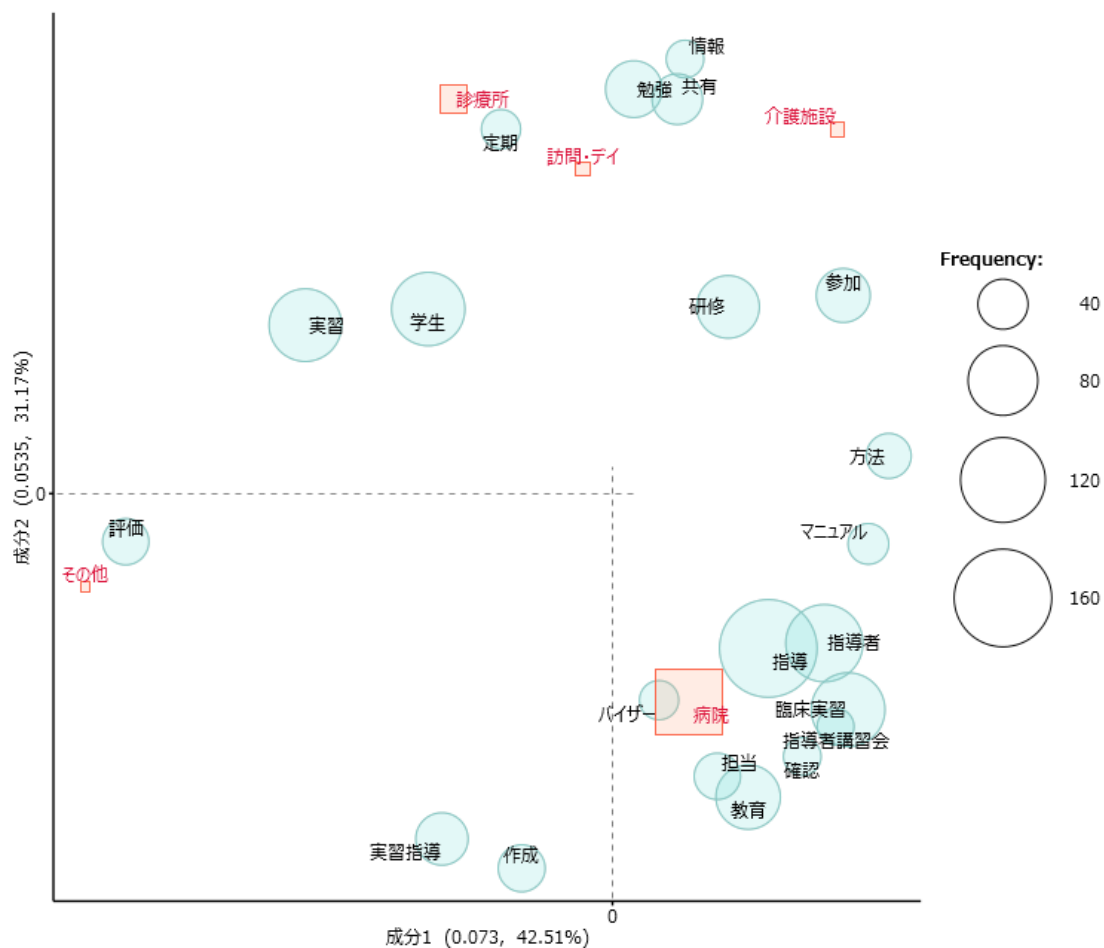
「わからない」と回答した者は、介護施設・訪問・デイで勤務する者 ($\chi^2=53.61$)、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会を受講済みの者で多かった ($\chi^2=20.30$)。

【回答別の比較】

「している」は「していない」よりも臨床経験年数が長い者が多かった ($F(2, 1139) = 10.62$)。また、「している」は「していない」「わからない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者

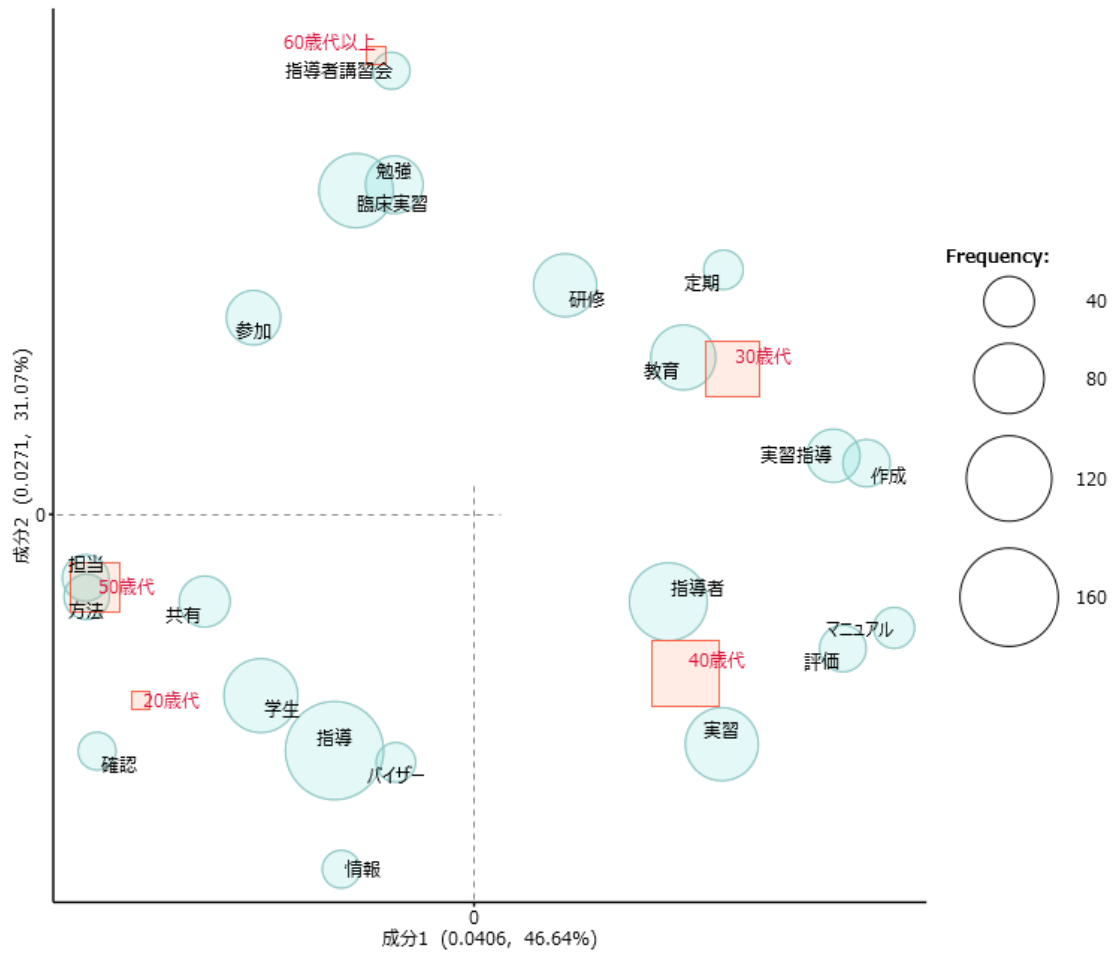
が多かった ($F(2, 1135) = 24.36$)。

設問 30. リハスタッフへの臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みを行っている
と回答された方にお聞きします。どのような取り組みをされていますか。



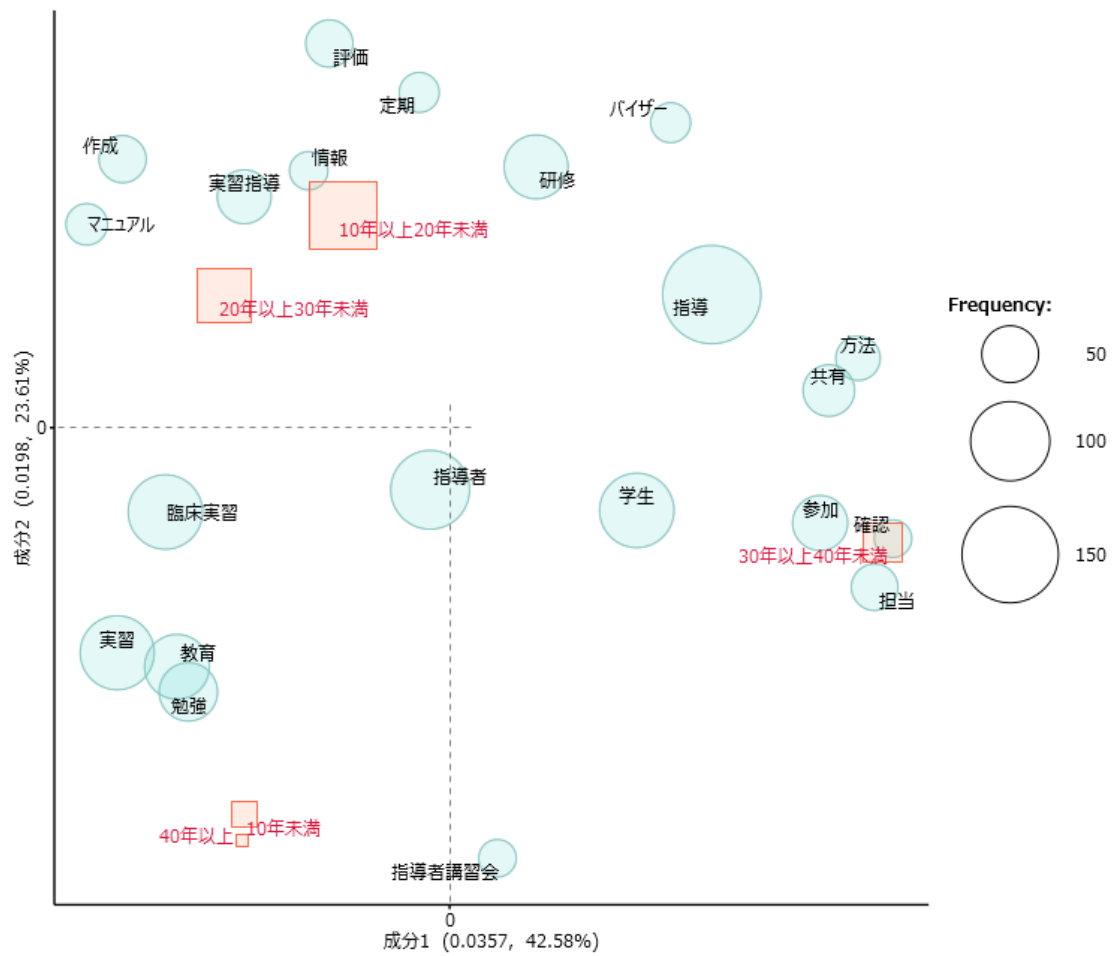
設問 30-1 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと施設種別の対応分析 (N=366)

病院では「バイザー」の育成やオリエンテーションなどの配慮に取り組んでいた。



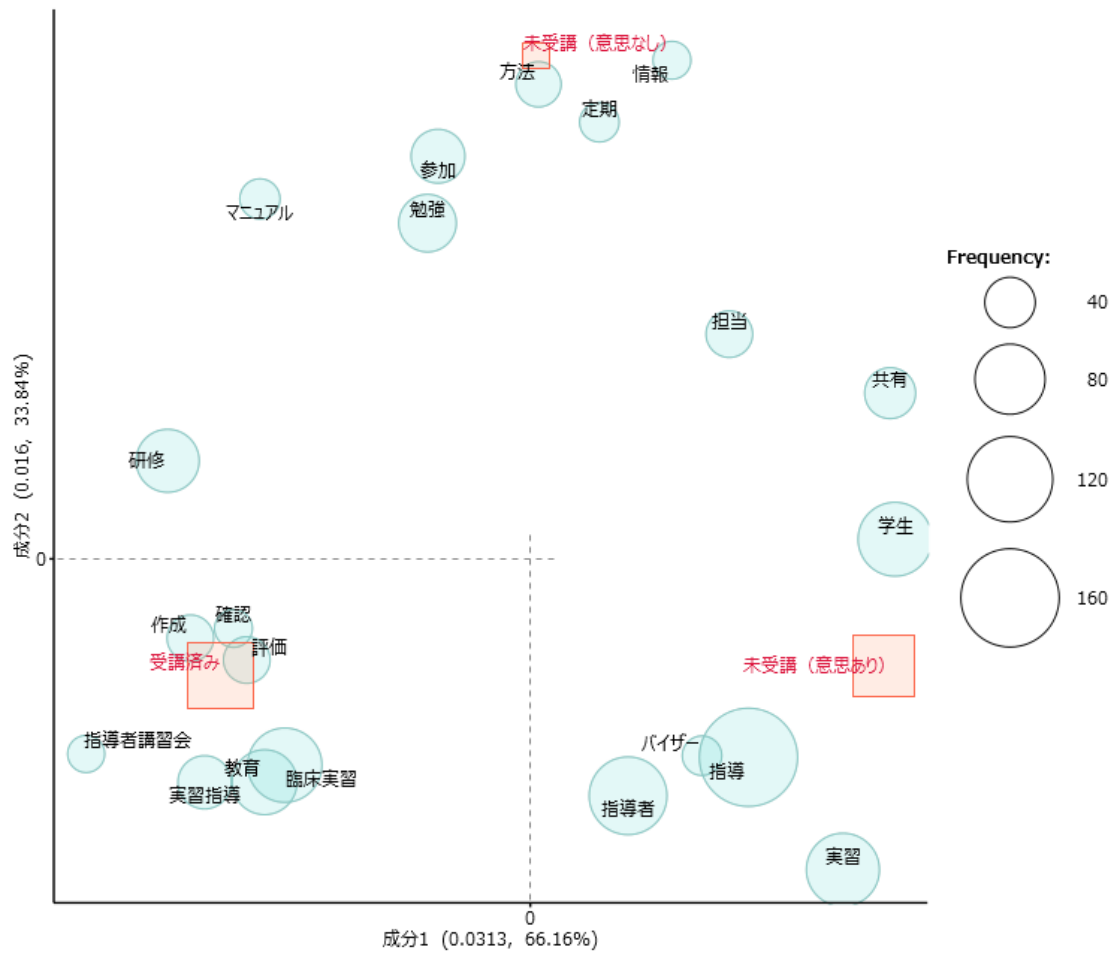
設問 30-2 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと年齢の対応分析 (N=366)

30歳代では「教育」をキーワードとした取り組みを、40歳代では「指導者」会議への参加やオリエンテーションなどに取り組んでいた。また、50歳代では指導「方法」と「担当」者を置くことに、60歳代では「指導者講習会」の受講の促進に取り組んでいた。



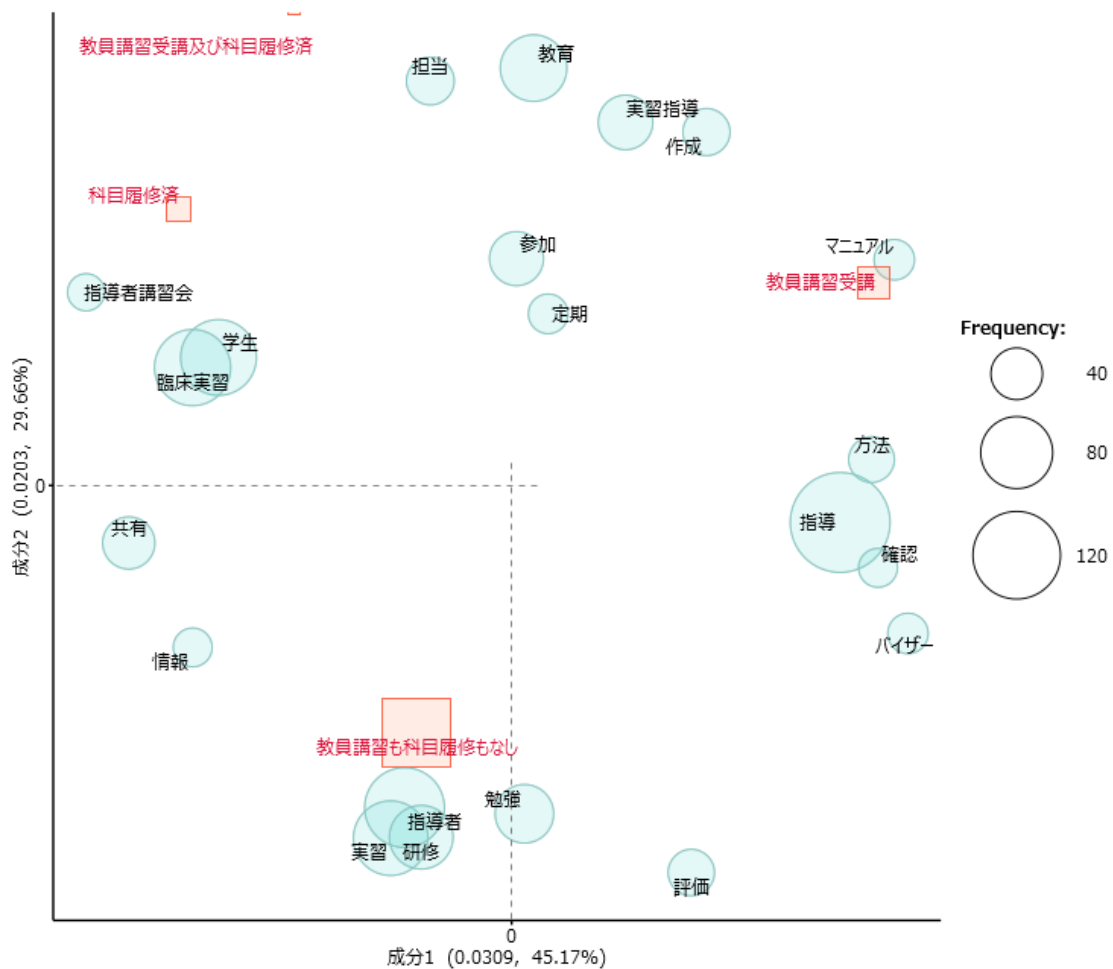
設問 30-3 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと臨床経験年数の対応分析 (N=366)

10年以上20年未満の者ではスタッフ間や他職種との「情報」のやり取りに、また、30年以上40年未満ではスタッフ間や状況などを「確認」することに取り組んでいた。



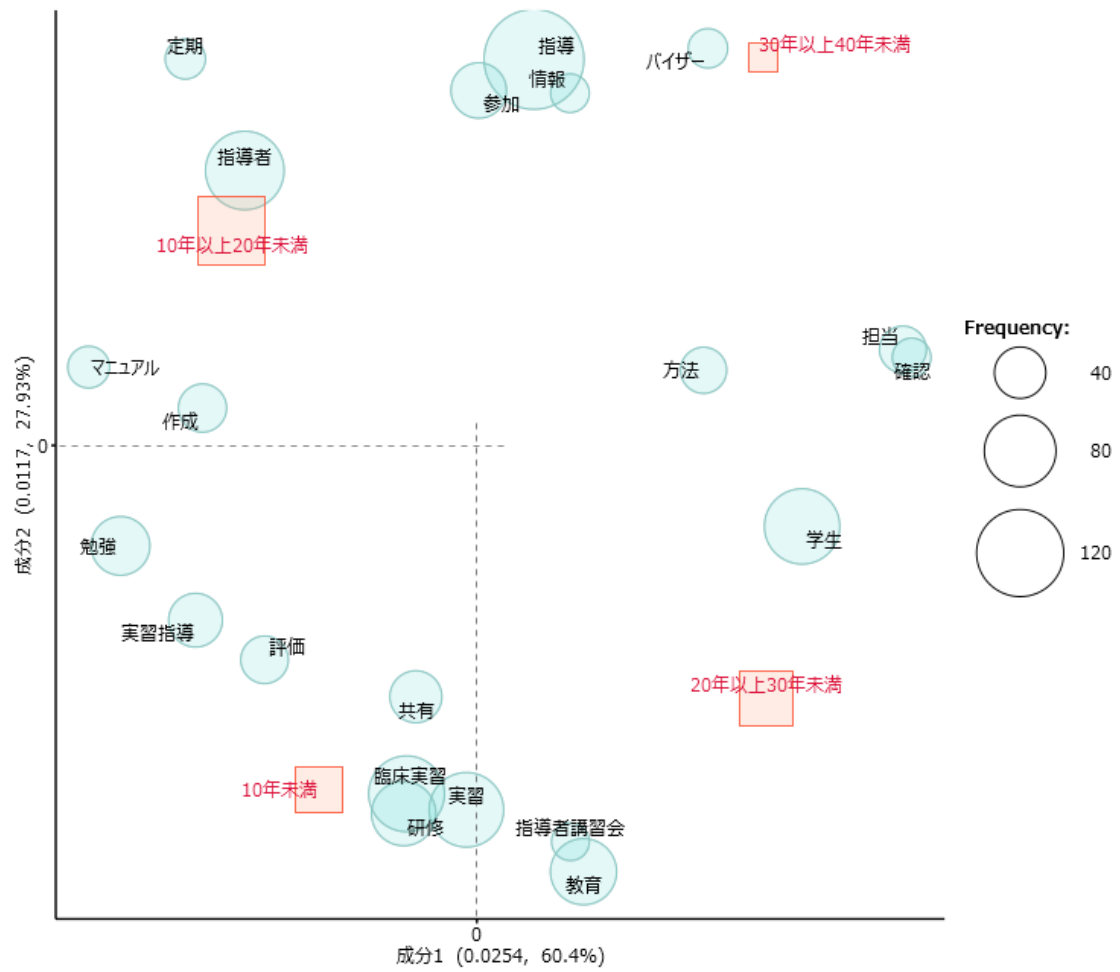
設問 30-4 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと臨床実習指導者講習会受講の有無との対応分析 (N=366)

臨床実習指導者講習会の受講者は実習計画や指導マニュアルの「作成」及び学生の「評価」と「確認」に取り組んでいた。一方、今後受講する意思がない未受講者では、学生の指導「方法」について取り組んでいた。



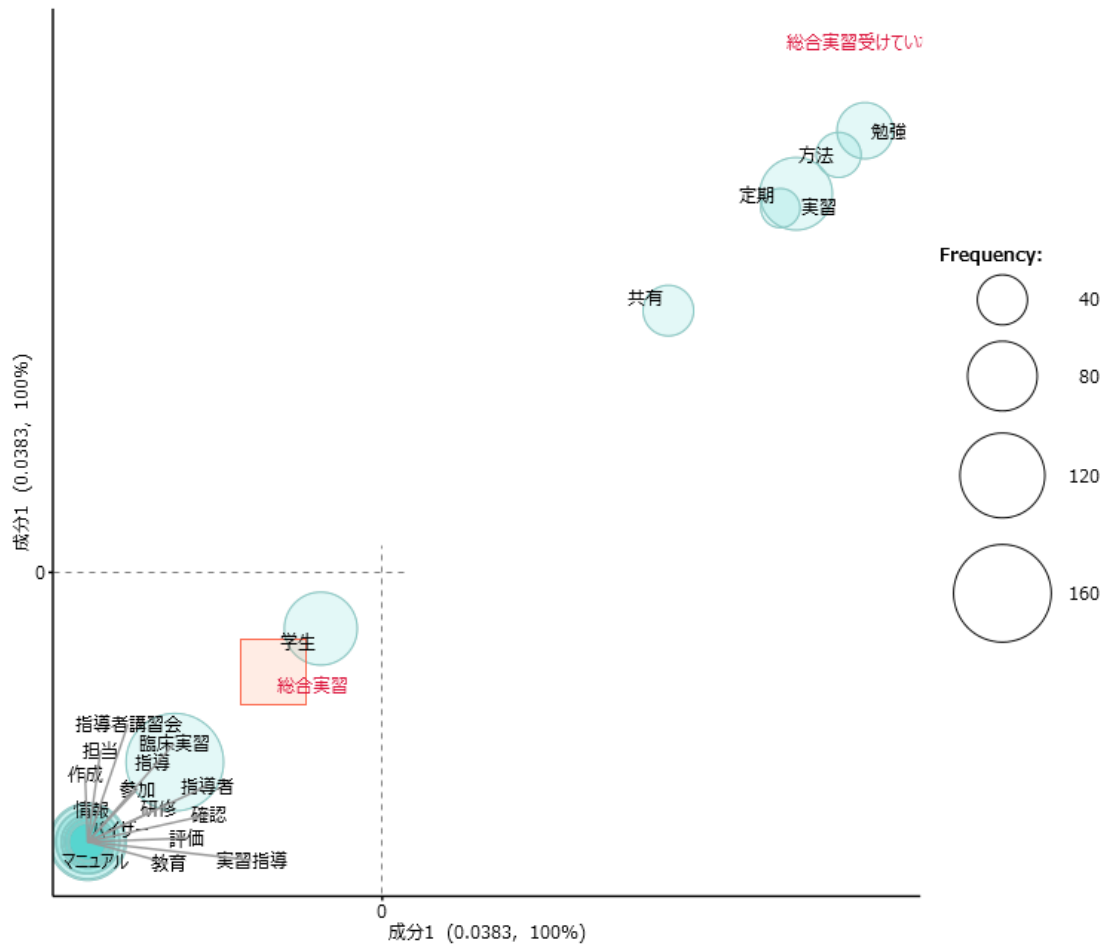
設問 30-5 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと教員講習会ないし教育学の科目履修の有無の対応分析 (N=366)

教員講習会のみを受講者では実習指導「マニュアル」を作成に取り組んでいた。また、教員講習会も教育学の科目履修のない者は、指導の負担や教育など「指導者」について取り組んでいた。



設問 30-6 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=366)

10年以上20年未満の指導経験者は「指導者」に対して指導者会議への出席やストレス軽減などの取り組みをしていた。



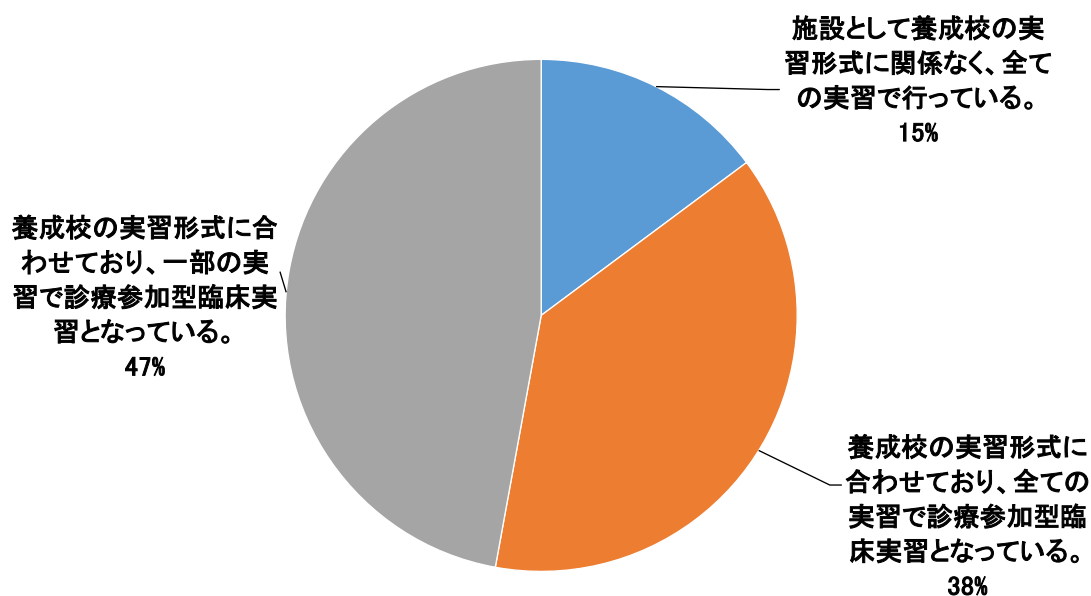
設問 30-7 臨床実習指導力向上に向けて組織的な取り組みと実習種別の対応分析 (N=364)

総合実習を受け入れている施設では「学生」の評価の仕方や指導方法などをスタッフに指導するなどに取り組んでいた。

【臨床実習の制度について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

設問 31. 令和 2 年度から施行された理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則では、臨床実習の実習形態として診療参加型臨床実習が推奨されていますが、以下の該当するものを選んでください。(N=1046)



「施設として養成校の実習形式に関係なく、全ての実習で行っている」と回答した者は、病院で務める者 ($\chi^2=26.78$)、教育管理系の認定・専門理学療法士取得の有無 ($\chi^2=44.13$)、総合実習を受け入れている施設の者 ($\chi^2=12.12$) で多かった。

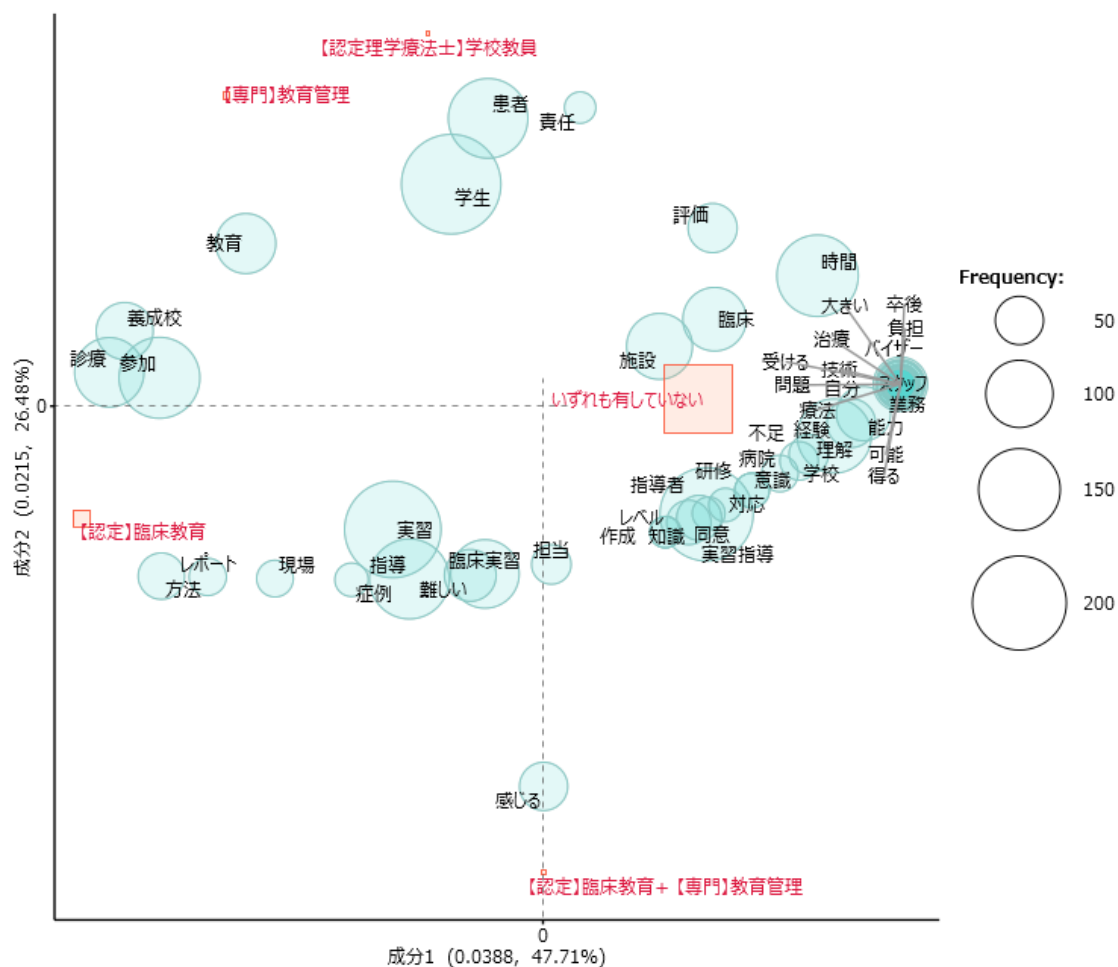
「養成校の実習形式に合わせており、全ての実習で診療参加型臨床実習以外で行っている」と回答した者は、介護施設で務める者 ($\chi^2=26.78$) で多かった。

「養成校の実習形式に合わせており、一部の実習で診療参加型臨床実習となっている」と回答した者は、総合実習受けていない施設の者で多かった ($\chi^2=12.12$)。

【回答別の比較】

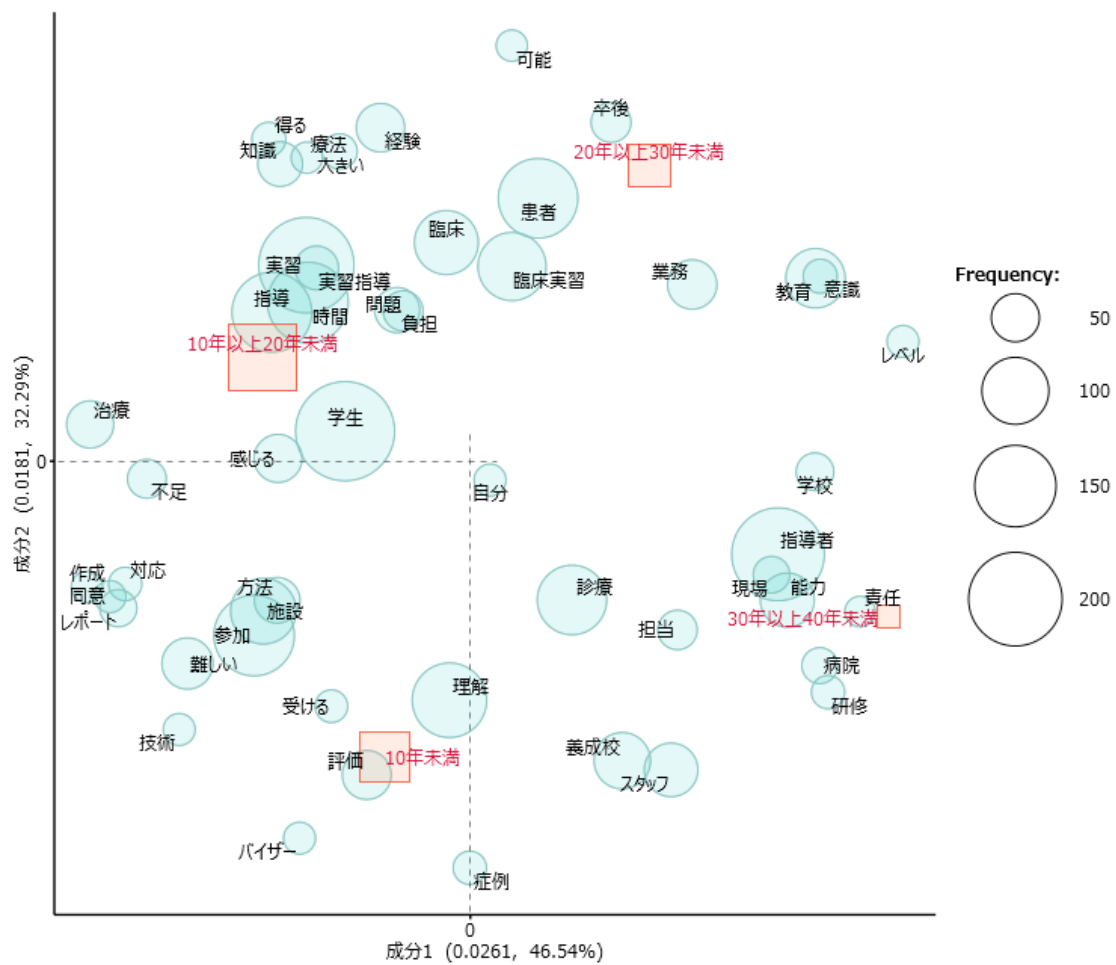
「施設として養成校の実習形式に関係なく、全ての実習で行っている」は「養成校の実習形式に合わせており、全ての実習で診療参加型臨床実習以外で行っている」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1079) = 2.67$)。

設問 32. 令和 2 年度から施行された理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則では、臨床実習の実習形態として診療参加型臨床実習が推奨されていますが、診療参加型臨床実習の完全実施にはどのようなことが課題とお考えですか。



設問 32-1 診療参加型臨床実習の完全実施への課題と認定・専門理学療法士取得の有無の対応分析 (N=869)

専門理学療法士および認定理学療法士のいずれの資格も有していない者は「施設」側の問題を課題に挙げていた。



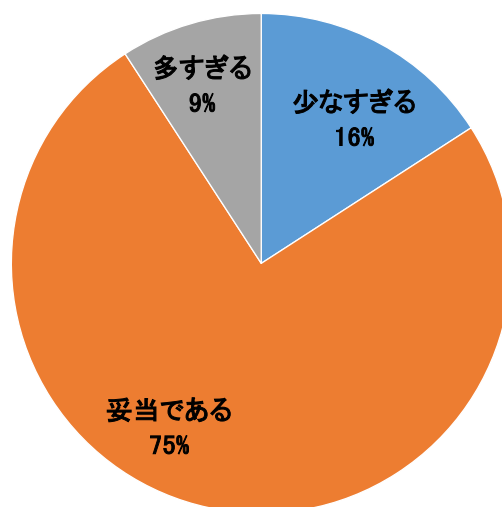
設問 32-2 診療参加型臨床実習の完全実施への課題と臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=869)

臨床実習指導経験年数が 10 年未満の指導経験者は学生や患者の「評価」を、10 年以上 20 年未満の指導経験者は「指導」する「時間」を課題に挙げていた。

【臨床実習の制度について】

*量的データはクロス検定および分散分析（多重比較検定には Tukey を使用）を実施し、危険率 5%未満で有意差のあるもののみ提示した。

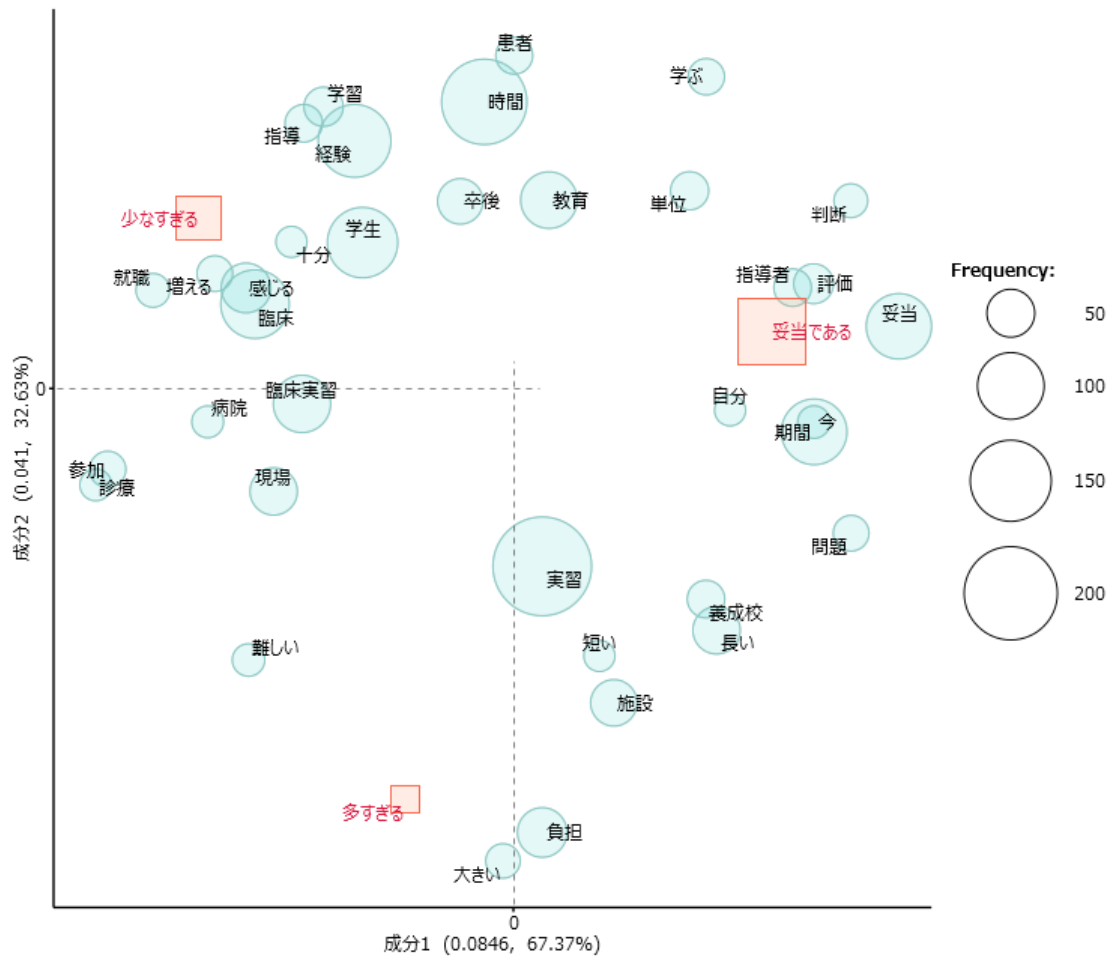
設問 33. 令和 2 年度から施行された理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則での「臨床実習時間数 20 単位（20 週）」についてどう思いますか。（N=1134）



【回答別の比較】

「臨床実習時間数 20 単位（20 週）」について、「少なすぎる」群では「妥当である」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった（ $F(2, 1116) = 3.77$ ）。

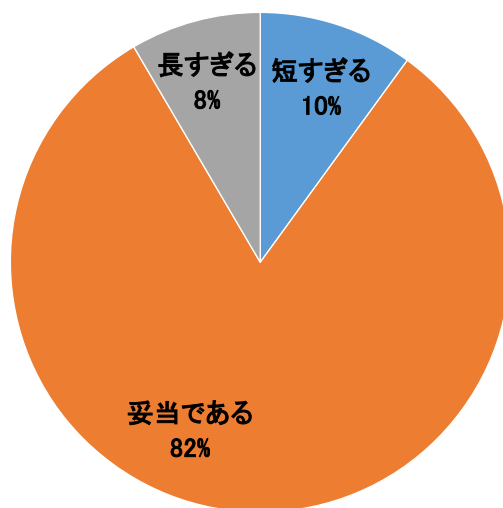
設問 34. 前問で回答された番号にした理由を具体的に教えてください。



設問 34 臨床実習時間数 20 単位 (20 週) についての意見とその理由の対応分析 (N=783)

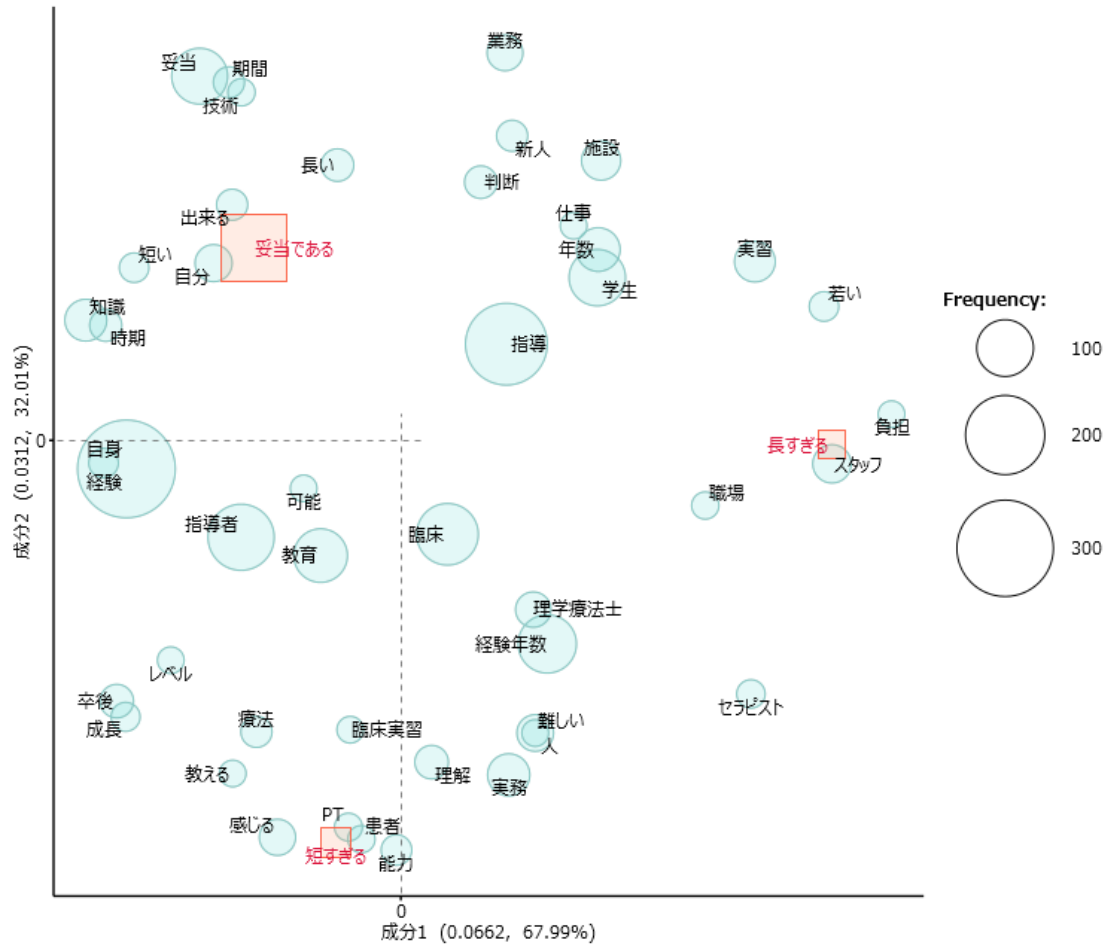
「妥当である」と回答した者は、指導者の数や負担など、「指導者」側の状況から考えて妥当と判断していた。

設問 35. 令和 2 年度から施行された理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則での臨床実習指導者の資格としての「実務経験年数 5 年以上」についてどう思いますか。
(N=1148)



基本情報のすべてと有意差がみられなかった。

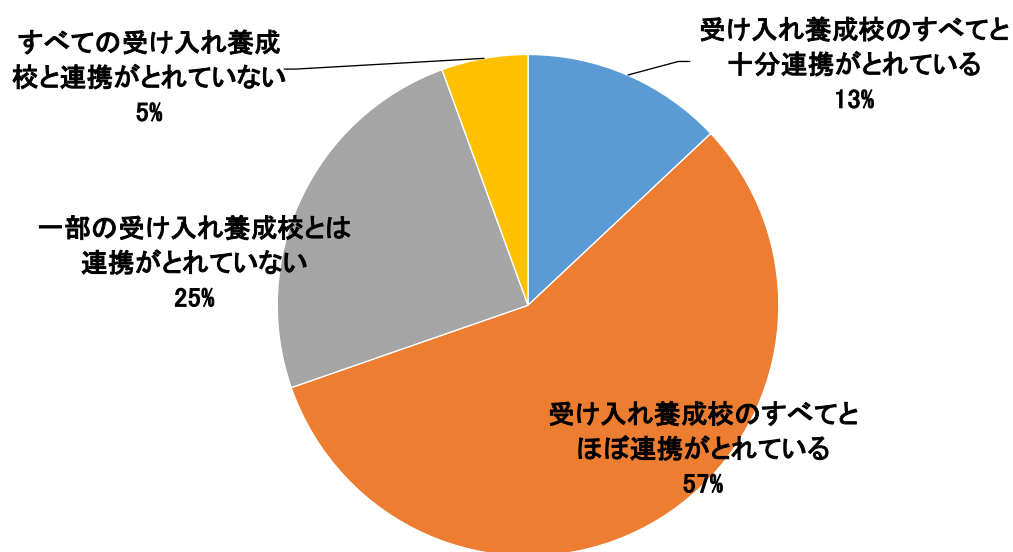
設問 36. 前問で回答された番号にした理由を具体的に教えてください。



設問 36 実務経験年数 5 年以上についての意見とその理由の対応分析 (N=810)

「妥当である」と回答した者は職場内や指導、経験するうえで「自分」で「できる」という理由で判断していた。また、「短すぎる」と回答した者は「PT」としての「患者」への対応を理由に、一方、「長すぎる」と回答した者は「スタッフ」の負担を理由に判断していた。

設問 37. 臨床実習施設と養成校の「連携」についてどのように感じていますか。(N=1131)

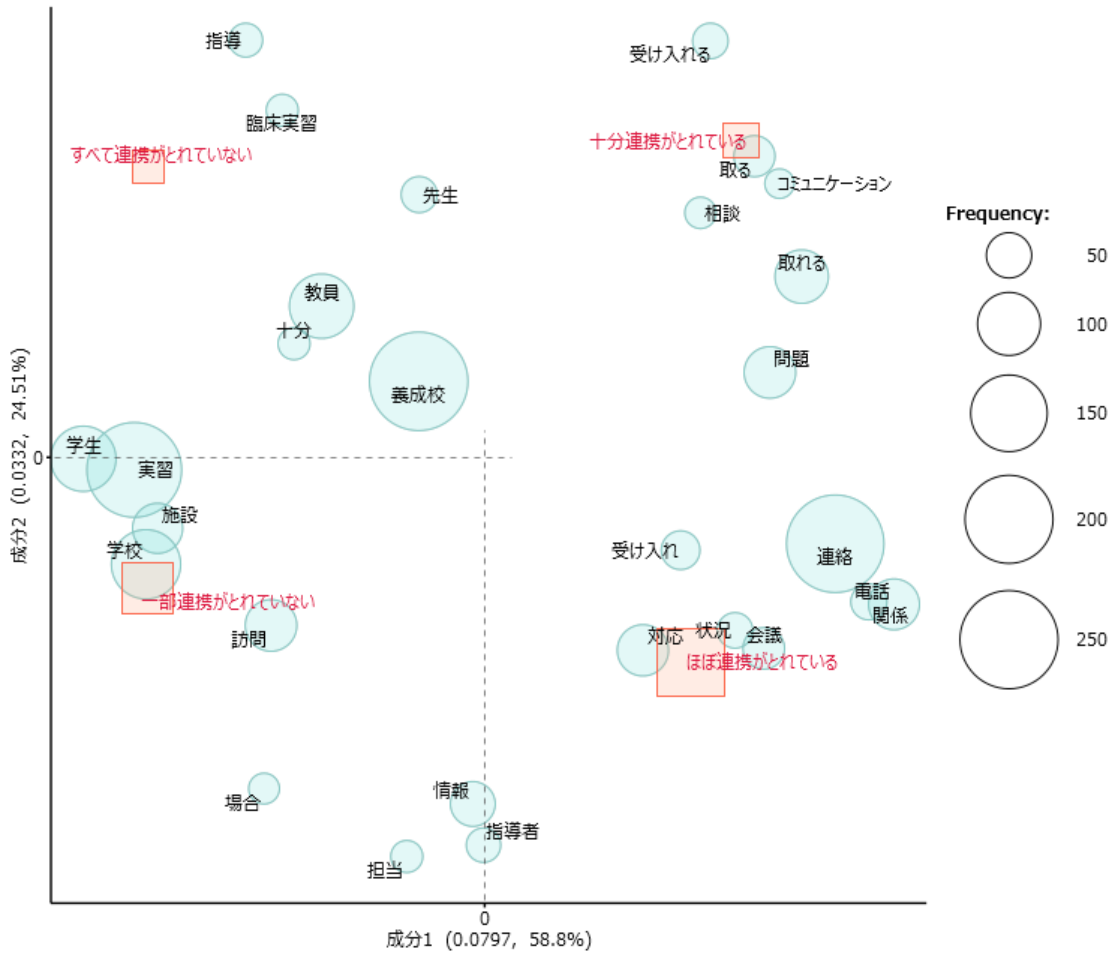


【回答別の比較】

「受入れ養成校のすべてと十分連携がとれている」は「一部の受け入れ養成校とは連携がとれていない」より臨床経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1116) = 4.57$)。

「受入れ養成校のすべてと十分連携がとれている」は「受入れ養成校のすべてとほぼ連携がとれている」、「一部の受け入れ養成校とは連携がとれていない」、「すべての受け入れ養成校と連携がとれていない」よりも臨床実習指導経験年数が長い者が多かった ($F(3, 1113) = 8.32$)。

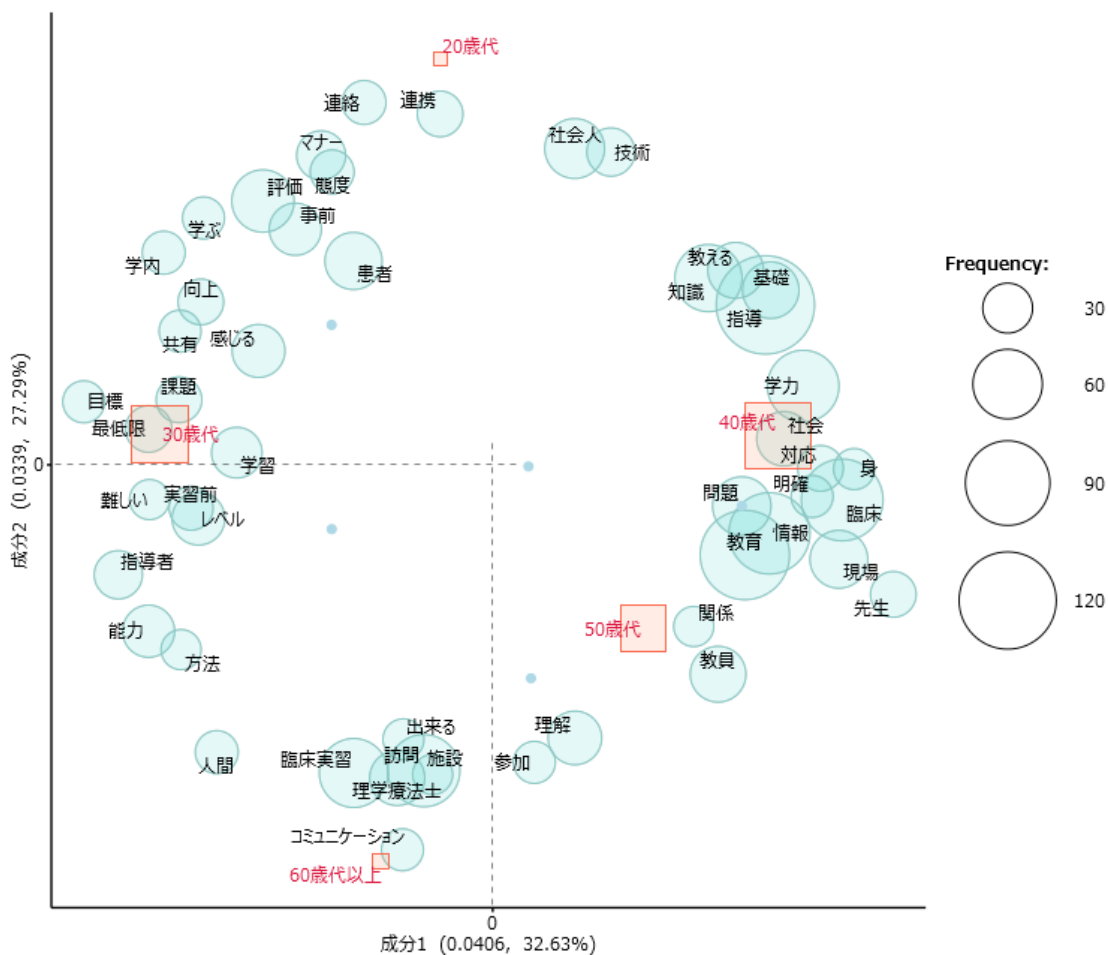
設問 38. 前問で回答された番号にした理由を具体的に教えてください。



設問 38 臨床実習施設と養成校の「連携」についての意見とその理由の対応分析 (N=755)

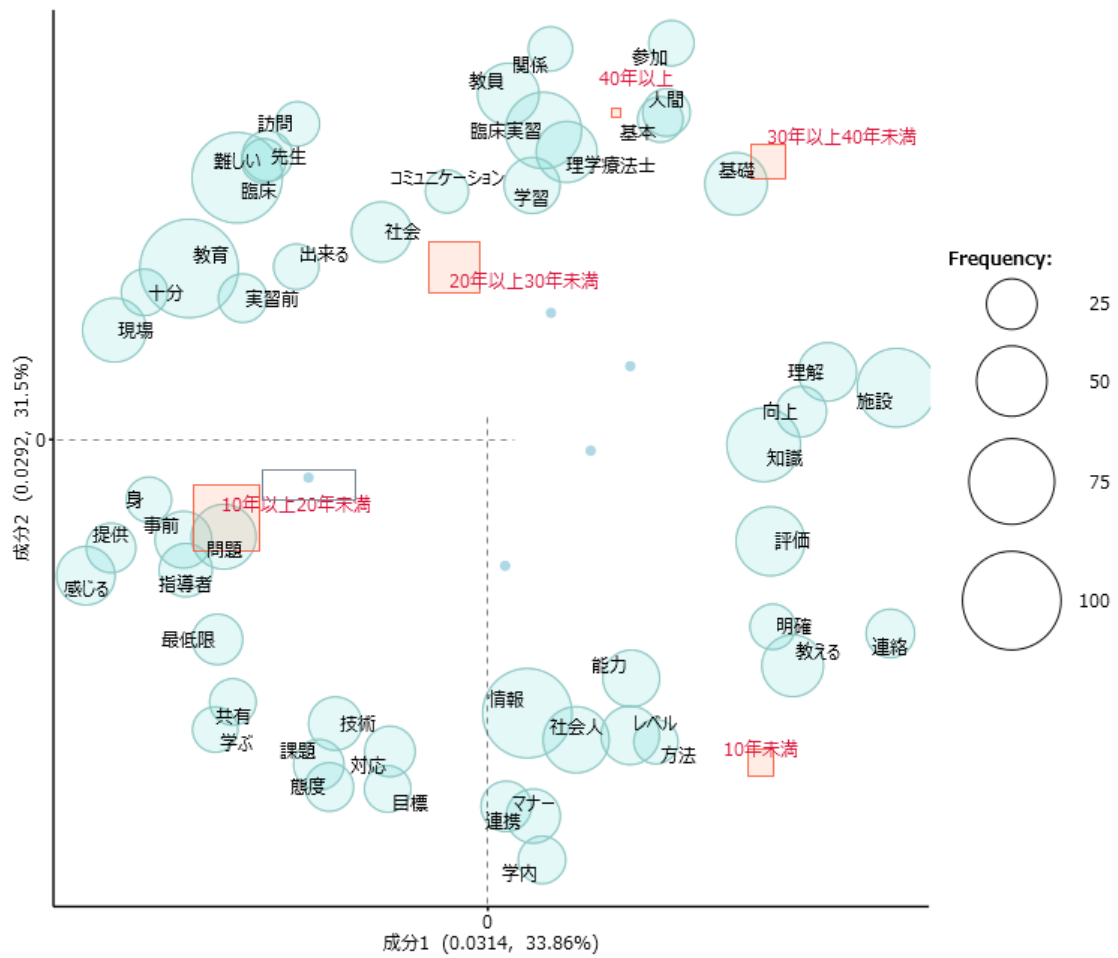
「十分連携が取れている」と回答した者はお互いに実際に連絡を「取る」か取らないかで判断しており、「ほぼ連携が取れている」と回答した者は「状況」に対する学校の「対応」で判断していた。また、「一部連携が取れていない」と回答した者は「学校」側の問題で判断していた。

設問 39. 実習生を受け入れるにあたって「養成校に期待すること」を具体的に教えてください。



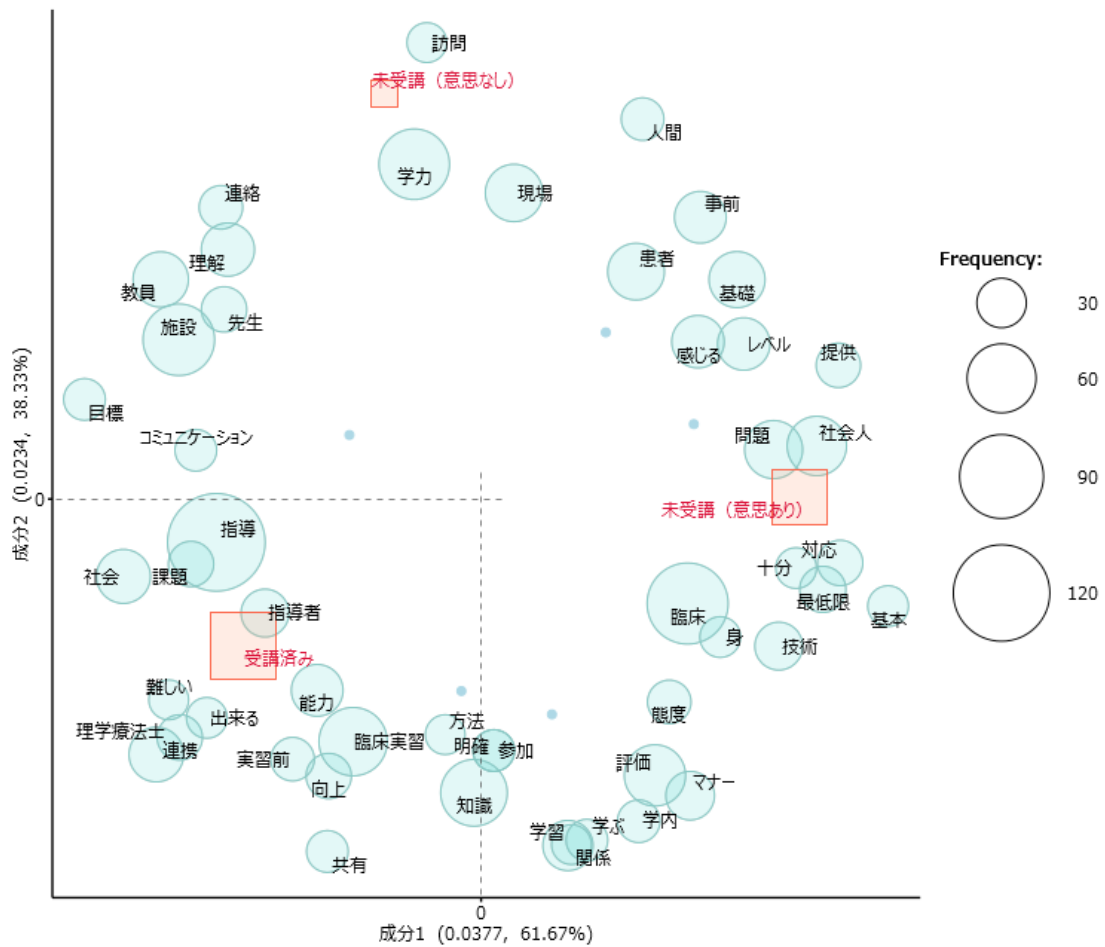
設問 39-1 養成校に期待すること年齢の対応分析 (N=749)

30 歳代では学生が実習を行うにあたっての態度・姿勢は「最低限」の「課題」として挙げ、40 歳代では学生の「学力」や「社会」への「対応」力を十分に付けて実習に出してほしいと期待していた。また、60 歳代以上では学生の「コミュニケーション」能力の育成を期待していた。



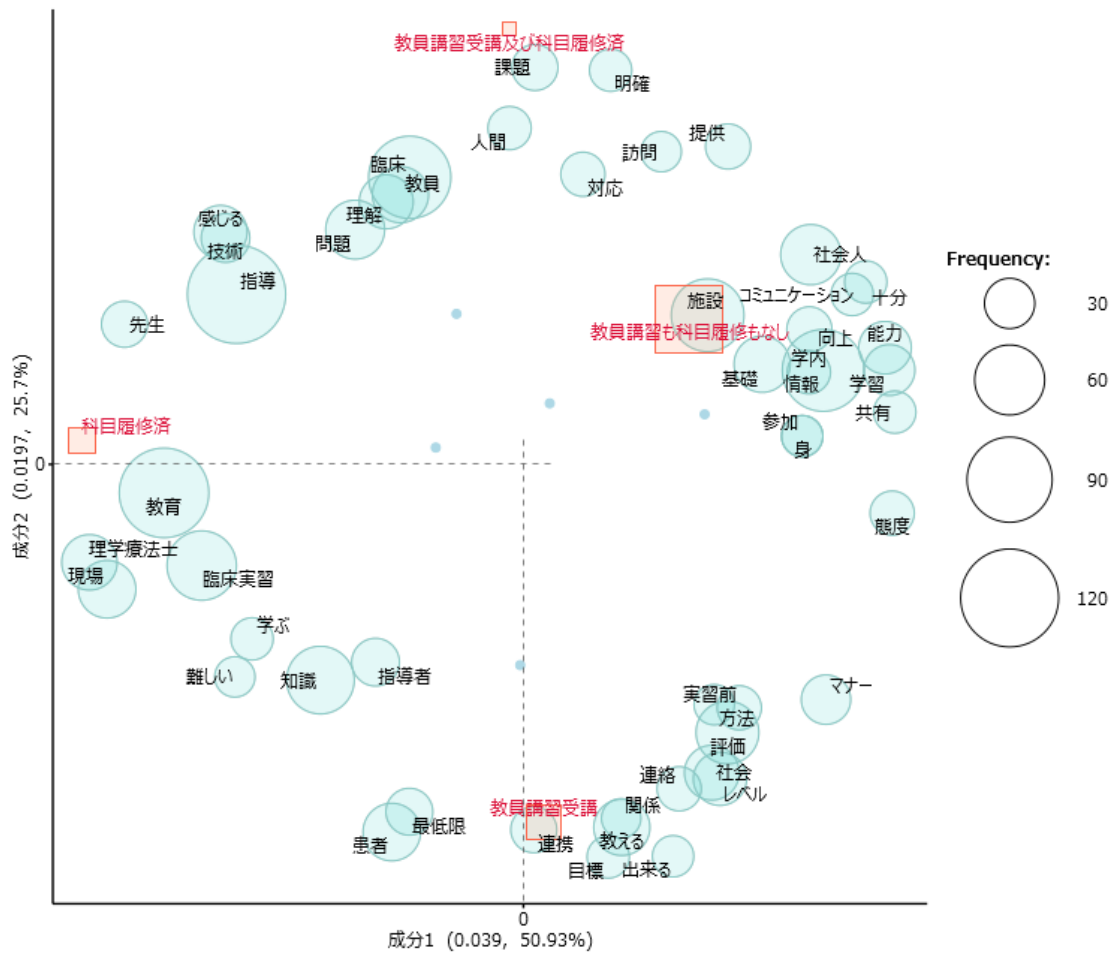
設問 39-2 養成校に期待することと臨床経験年数の対応分析 (N=749)

臨床経験年数 10 年以上 20 年未満では学生の「問題」を「事前」に連絡するよう期待していた。また、30 年以上 40 年未満では学生の「基礎」学力や「基礎」知識の向上を期待していた。



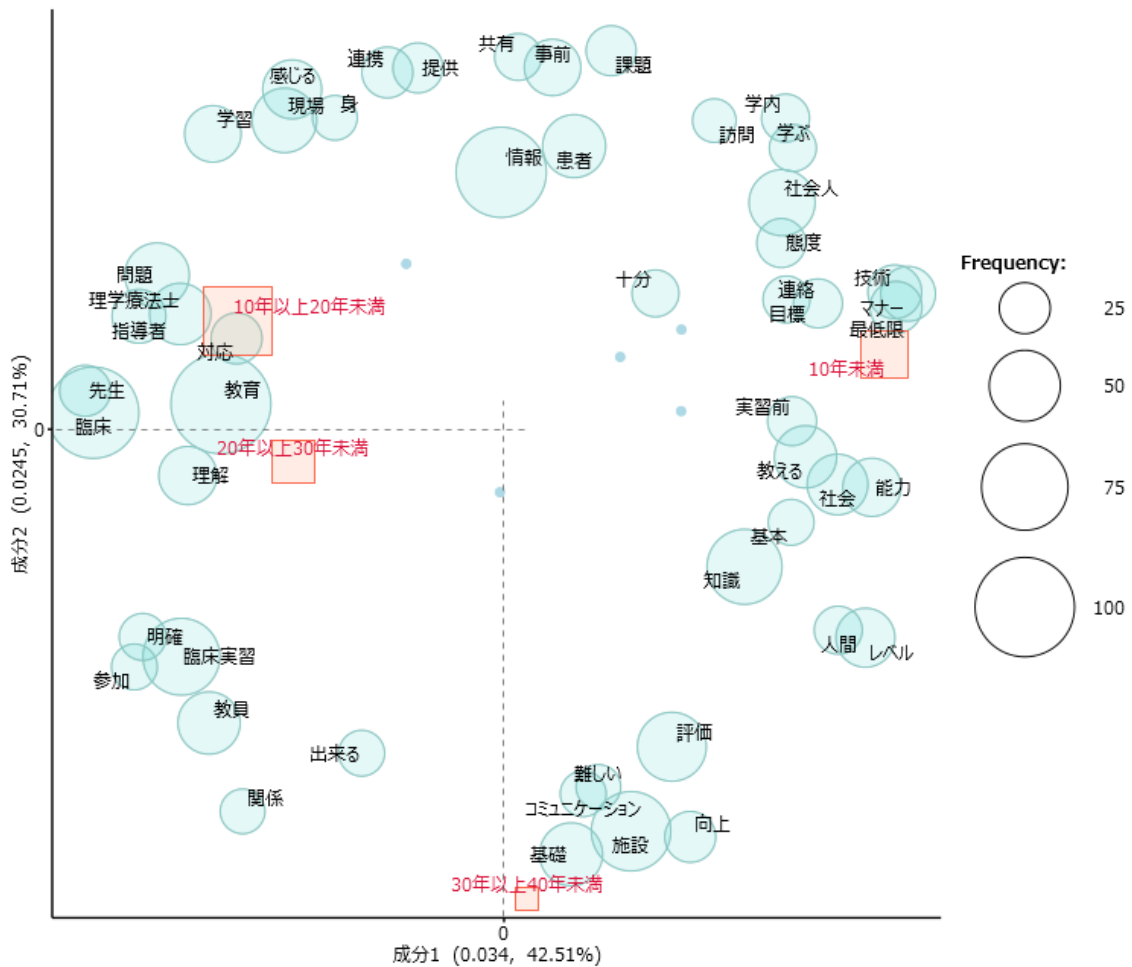
設問 39-3 診養成校に期待することと臨床実習指導者講習会受講の有無の対応分析 (N=749)

臨床実習指導者講習会の受講者では「指導者」への指導方法のアドバイスなどを期待していた。今後受講する意思のある未受講者は、学生の「社会人」としての「問題」に対処するよう期待していた。



設問 39-4 養成校に期待することと教員講習会ないし教育学の科目履修の有無の対応分析 (N=749)

教員講習会のみを受講者では学校と臨床実習施設との「連携」を、教員講習会も教育学の履修もない者は実習を「施設」任せにしないようにしてほしいと期待していた。



設問 39-5 養成校に期待することと臨床実習指導経験年数の対応分析 (N=749)

臨床実習指導経験年数が10年未満の者は学生の知識や技術あるいは社会性など「最低限」身に付けることを、10年以上20年未満の指導経験者は学生の「理学療法士」として必要な「対応力」の育成に期待していた。

<謝辞>

本研究のためのアンケート調査にご協力いただいた理学療法士のみなさま、アンケート調査の協力依頼にご尽力いただきました理学療法士の諸先生方、日本理学療法士協会事務局学会事務課の職員の皆様には心から感謝いたします。

日本理学療法教育学会
教育研究調査ワーキンググループ